
彼女が隠した心

晴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女が隠した心

【Nコード】

N7930S

【作者名】

晴香

【あらすじ】

ある日、米花町に新しく音楽ホールが出来る。園子に誘われ、コンサートを観に行くことになったコナン・蘭・小五郎だったが、そこでオーボエのソリスト瑠美子が殺害されてしまう。真相を突き止めていくコナンだったが、蘭の様子がおかしく。

秘めた感情（前書き）

これは名探偵コナンの二次小説となります。

話の都合上、やっぱり事件が起こるわけですが、あまりにも内容・トリック共に未熟です。

素人ですので、無理矢理なトリックですが、それに当たっては多目に見ていただけたらと思います。

また、話を書くにあたって人物のキャラや口調を本物に近づけようと心掛けてはいますが、読者の方々によっては不満に思う方もいらっしゃるかもしれません。

途中で、読みたくないと思いましたら、急いでバックして下さい。

楽しんで読んで下さったら幸いです。

新×蘭な要素が含まれています。苦手の方はご注意ください。

秘めた感情

疑問を覚えたのは、これが初めてではなかった。

でも、その度に突き付けられてきたのは彼とは別人なのだと
いうこと。

悲しみと安堵が緋い交ぜになったような気持ちだった。

でも、それは受け入れられた。

心の隅では“違う”と思っていたから。

彼の幼い頃と顔が、ふとした仕草が、小さいのにどこか感じる彼の

遅しさが。

全部、似ているだけで同じではないのだと。

“コナン君が新一だったら良かったのにな”

こんなのはただの願い。

所詮は叶わぬ願い。

押さえきれない願い。

会いたい気持ちを持って余して、ずるいと知りながら彼の優しさに甘えた台詞。

だから、今回も胸の疑いを晴らしてくれればいいと、願っていた。

逢いたいからとそんな小さな希望に縋ってしまう自分に、現実を突き付けてくれればいいと。

目覚ましが鳴る

始めは事件に遭遇した時の表情。それに不信感を抱けば、次々と疑問で溢れ返った。

そういえば、父が推理している時はいつも背後から現れ、いろいろ手伝っているな、とか、服部はいつも彼の名前と間違えているな、とか、灰原という時は何処か大人びているな、とか。

考え出したらキリがなくなってしまうて。

問い詰めたかと思いつつ、でも彼が話してくれるのを待ちたいとも思っている自分もいて。ただ、何より……。

(新一……)

全ての感情が詰まったように、待ち焦がれる人の名を想う。

ジリリリリ!!

と、耳元で目覚まし鳴り響いて、蘭はハッと我に帰った。体を起こして時間を確認する。ちょうど六時だ。

寝不足に重い体を無理矢理起こして、蘭は支度を済ませるとあと一時間したら起きてくるであろう二人のために朝食の準備に取りかか

った。

その間も考えてしまうのは彼のこと。確証はないとはいえ、彼だと思ってしまう自分に、普通に接することは難しい。心がけてはいるが、果たして出来ているかどうか。

鮭にこんがり焼けたところで皿に盛り付け、大根おろしを添える。味噌汁とご飯と一緒にテーブルに並べた所で、二人は起きてきた。

「ふああ…」

「あ、蘭姉ちゃん。おはよー…」

「おはよ、お父さん、コナン君。朝ご飯出来てるから、支度してきてね」

「はあーい」

欠伸を噛み締めながら去っていく小さな背中を、何とも言えない表情で蘭は見送ったのだった。

大切ならなおさら

「彼女、気付いてるんじゃない？」

「あん？」

赤茶の髪が特徴的な少女、灰原哀は一言コナンに言った。

脈略のないその台詞に、何の話だとコナンは聞き返す。すると、灰原は視線を後ろに向け「貴方の正体よ」と付け足した。

コナンも、灰原の視線を追う。そこには、園子と楽しそうに話す蘭の姿があった。

「ははっ、まさか」

そして、コナンはあり得ないと結論した。

「あら、どうしてそう言えるのかしら？」

試すような口振りに、コナンは蘭から視線を外す。そして、淡々とその説明を述べた。

「今のところ、そんな素振りはない。第一体が縮んだなんて突拍子もねえ話、何かの確証がない限り誰も思いつかねえよ」

「そう？でも、彼女は実際に何回か貴方の正体に感じているのよ？」

「まあ、それはそうだけだよ……」

からかうような口調に言い返す言葉はない。事実、何度彼女にバレそうになったことが。今でも冷や汗が出てくる。

灰原がいなければ危なかっただろう。コナンは話を変えるように言った。

「どうしたんだよ、急に。お前が心配するのは分かるけど、そう敏感になる必要はないんじゃないのか？ここらへん、あんま奴らとの進展もねえしな」

残念そうな様子に灰原は一瞬眉を寄せるが、すぐにクスと笑う。

まだ朝だからか、眠そうなコナンは何だよとばかりに半分閉じた目を向けた。

「違うのよ、江戸川君。そうじゃないわ」

ますますコナンは訝しげな視線を送る。

「分かるのよ」

「はあ？」

そう言う灰原の表情は自信に溢れていて、コナンはそれ以外何も言えない。最後の反抗にとコナンは問うた。

「何でそう言い切れるんだよ…？」

「そうね、あえて言うなら女の勘かしら」

あっけらかんと言つてのけた灰原にコナンは目を丸くする。いやに確信を持つていつのだから、それなりの理由はあると思つていたが。

コナンは半笑いを浮かべた。

（ははー、勘かよ…）

そんな考えを読んだのか、灰原は何処か見透かしたように言う。

「あら、女の勘を甘く見ない方がいいわよ、江戸川君。女つてのは

ね、男が考える以上に人のことをよく見ているのだから」

警告をする灰原の表情は厳しくて、聞き流すには軽くはなかった。

しかし、どうにもまだ危機感の薄かったコナンは「わぁーっただよ」と返事をしたきり、深くは考えることはしなかったのだ。

一方で、灰原は「やだー、何それ。おつかしいー！」何て笑う蘭に視線を向けていた。

(そう、大切に思う人なら尚更……)

灰原はす、と目を細める。

「おい、灰原？」

立ち止まってしまっていたらしい。少し前で自分を待つコナンは警告など全く気にしていないようで、灰原は思わずため息を零した。

少年探偵団諸君

(気をつけなさい、ねえ…)

この漢字の書き順が分かる人はいるかな？の問いに、一斉に挙がる掌をぼんやりと見ながら、コナンは朝の灰原との会話を思い返していた。

これまでの蘭の様子を頭に浮かべてみるが、やはり自分の正体に感づいているような素振りはないように思う。ただ …。

(アイツ、最近眠ってねえみてえなんだよな…)

そう、ここ何日か蘭は眠れていないようなのだ。周りはまだ気付いていないようだが、よく見れば目の下にはうつすらと隈があるし、顔色も冴えない。

(まさか、本当に俺に気付いて…?)

一つの可能性に、コナンは肘をついた手から頭を浮かし、すぐに“ないない”と元に戻した。

気付いているなら、どうして自分に聞いてこない？

待つてるんや。お前から話してくるんのをな。

以前、服部に言われた言葉を思い出す。

(あり得ねえよ…)

コナンは肘を浮かせると、先生に言われるがままに漢字を書き取っていくのだった。

「っ！コナン君！」

「へっ？」

考えに耽っていたコナンの耳を、突如大きな声がつんざいた。見ればじとつとした目で三人の少年少女が自分を見ている。

「もっっ、コナン君聞いているの!?!」

「え、あ、悪い。何の話だっけ？」

視界の端で灰原がクスリ、と笑うのを捉えて見て居心地の悪さを覚えつつ、コナンは顔をしかめる光彦・元太・歩美の三人に聞き返した。

「ですから、今度東京新音楽ホールの開館を記念してコンサートをやるそうなんですよ！」

「ん、ああ。あの新しく建ててたやつか」

両手を広げて言う光彦に、コナンは「出来たのか」と頷いた。すると、今まで黙って聞いていた元太が尋ねてくる。

「なあなあ、その東京何とかって何だ？」

「東京新音楽ホールですよ、元太君」

「いいなー！歩美、行きたーい！」

一人多い事務所

「俺も、俺も！」

よく分かってないのに、慌てて手を挙げる元太に光彦は苦笑して、思いついたように人差し指を立てた。

「あっ、じゃあ博士に連れて行ってもらいましょう！」

「さんせーい！」

「ついでに、鰻重食わして貰おうぜ！」

(ははは、こりゃ博士も苦労するな…)

無邪気に博士に高い物を強請る算段をたてる子供三人は、ある意味、下手な犯人よりも質の悪いものだろう。

「止めときなさい」

すると、一人本を読んでいた灰原が声を上げた。

「コンサートを見に行くにはチケットが必要なよ。聞けば、そのコンサートがやるのは三日後。今からチケットを頼んだとしても、もう手遅れだわ」

「あー、確かに…」

「残念…」

最もな灰原の意見に、光彦と歩美は肩を落とす。一人、分かっている元太だけが「なあなあ、鰻重は？」と首を傾げていた。

目一杯背伸びしてドアノブを回す。毎日の事ながら、高校生ともあるう自分が背伸びしなければドアも開けられないなど、何て情けないことか。

「ただいまー」

「あ、コナン君！お帰りなさい」

ドアを閉め、振り返ったコナンは、そこにいる人物に「あれ？」と声を上げた。

「園子姉ちゃん？」

ランドセルをおろしながら、コナンは小五郎の前に立つ園子達の元に近寄っていった。

園子に誘われて

「よ、ガキンちょ！ちょうど良かった！あんたも来るでしょ？」

腰に手を当てて、顔を覗き込んで来る園子に、話が読めずにコナンは首を傾げる。すると、それを見て蘭が説明した。

「三日後のコンサートよ。ほら、あの新しく出来たホールでやる…、コナン君も知ってるでしょ？」

(ああ、さっき光彦達が話してた…)

「そのこのホールの建設費、うちも少し寄付してたのよ。そしたらコンサートを観に来ないかって誘われたの。リハーサルも見せてくれるらしいし…、ねえ、蘭も行こうよ！おじ様とコナン君連れてさ」

「あたしは行きたいけど、お父さん達は…」

「僕はいいよ？」

コナンと小五郎の様子を窺う蘭に、コナンは快く言う。そうすれば、視線は自ずと小五郎に向いた。新聞を読んでいた小五郎は、その視線に気がつくと気まづくなっただのか顔を隠して「勝手にしろ！」と降参したのだった。

東京新音楽ホール

全体的にガラス張りで出来た、緩やかなカーブを描いた独特な形の東京新音楽ホールは、確かに以前に比べ規模、デザインともに数倍になっていた。

赤茶色の煉瓦が敷き詰められた会場の前には、なかなか大きな噴水が涼やかな水音を奏でている。

「ほう、こりゃまた立派なもん建てたなあー」

「わあっ、綺麗ー！」

園子の家の車から降りた小五郎と蘭は、辺りを見回して感嘆したように行った。同じく、車から降りたコナンもへえ、と綺麗な外観に感心を隠せず目を丸くした。

新東京音楽ホール

「まあ、有名なデザイナーに設計頼んだみたいだからね」

側にやって来た園子は、そう言うと「こっちよ」と先を歩いていった。

中は白を貴重に創られていた。フロアは真っ白な石英を使っているのか一点の曇りもなく、何の工夫がされているのか水陰がゆらゆらと揺れている。

高い天井には豪華な縦長のシャンデリアが吊され、全面硝子張りの壁からは夏の眩しい日差しが惜しげもなく注がれていた。

所々に飾られた観葉植物が、唯一白い空間にある色のように思える。

園子は受け付けを真っ直ぐ通り過ぎると奥へと入っていく。一定の感覚で並ぶ白い壁に映える焦げ茶色の扉が並ぶ緩やかなカーブを描いた廊下を歩き、しばらくすると少し広い場所へ出た。扉にはAと掲げられている。

「じいよ」

園子は言うと同時に扉を開いた。途端にぐわん、と耳をつんざく何重ものハーモニーが溢れてきた。

「わっ」

思わず小さな叫び声を上げた蘭の背を園子が小さく押しして中に入れ、続けてその隙間をコナンが入っていく。最後、小五郎が入ったのを確認して扉を閉めた。

中は、一転して黒と赤を貴重とした造りになっている。

(ベートーヴェン交響曲第七番が…)

コナン達が入って来たのは、ホールの真後ろの扉だったらしい。足音をたてぬように移動し、半分より前の真ん中に座ったその時、ちようど曲が盛大な盛り上がりを見せて終わった。

すると、その後金管楽器やパーカッションなど、多くの楽器が去り、弦楽器のみが残る。否、正しくはオーボエも残っている。オーボエを持った、黒いドレスを着た女性が指揮者の隣に立った。

すると、弦楽器のハーモニーにオーボエの軽やかな音が乗った。

「可愛い曲…」

蘭が隣でそう言ったのを聞いて、コナンは小さく微笑んだ。

そのうち全ての曲目を終えた。指揮者は考えるようにスコア（各楽器の楽譜が書かれた指揮者用の楽譜）を捲る。

「あの人は忍木晴信。今回このオーケストラの指揮を務める人よ」

白髪混じりの髪をオールバックにした中年男性を、園子は指差して紹介した。

その忍木はあるページで指を止めると、ヴァイオリンを指揮棒で差した。すると、ヴァイオリンが一斉に弾き始める。

しばらくそんな練習を繰り返して一通り納得したのか、忍木は休憩を告げた。後ろを振り返り、園子を見つけるとステージから降りて近寄って来る。

注目は毛利小五郎

「お久しぶりですな、鈴木さん！」

手を差し出してくる忍木に、園子は立ち上がって答えた。それに習って、コナン達も立ち上がって軽く会釈する。

「忍木さん、紹介するわ。ご存知だとは思っけど、こちら探偵の毛利さん。そして彼女がその娘の毛利蘭で、こちらが江戸川コナン君」

紹介され、頭を下げたコナン達に、忍木は驚いて声を上げた。

「おお、貴方があの有名な！」

顔を輝かせながら忍木は握手を求める。すると、小五郎はだらしなく笑みを浮かべてそれに応じた。

「そんな有名ですかなあ？」

ガハハハと笑う小五郎に、蘭は恥ずかしそうに顔を俯け「もう、お

父さんつたら」「と零し、「コナンは呆れたようにそれを見ているしかなかった。」

「忍木さん！」

そんな騒がしい集団に気がついたのか、五人の男女が集まってきた。

「そちらの方々は？」

尋ねてきたのは、明るいブラウンの髪を下の方で緩くまとめた顔の整った女性。リハーサルに関係者以外の人間がいることが珍しいのだろう。不思議そうに首を傾げている。

それが分かって、今度は忍木が園子に代わって紹介をした。

すると、やはり注目は小五郎にいくらしい。目を丸くして、次には有名人に会ったように顔を輝かせていた。

「わあー！あの眠りの小五郎で有名な！？」

「そりゃ、凄い！俺、ファンなんですよ」

寄って集って寝めちぎるものだから、小五郎は更に調子に乗ったのだろう。より笑みを深めてそれに答えている。

「毛利さん、紹介します」

頃合いを見計らって忍木は次に、五人の男女を紹介してきた。まず、始めに示したのは先ほど尋ねてきた女性。

「こちらが1st・ヴァイオリンの木ノ内静君」
キノウチシズカ

木ノ内は笑みを浮かべて頭を下げた。

「こちらがオーボエの岩崎進君」

黒髪で眼鏡をかけた身長の低い気弱そうな男性である。。

「トランペットの志堂兼嗣君」
シタウカネツグ

「どーも」と、軽い調子で挨拶をしてくる。茶色っぽい髪の毛で、前髪を軽く後ろへ流してセットしている。なかなかの男前だ。

一瞬感じたのは

「フルートの春川七海君」

黒髪のボブが可愛らしい女性が頭を下げた。

「そして最後、こちらが浅上瑠美子君だ」

ウェーブのかかった髪を緩く横に流した女性が微笑んだ。すると、
蘭が「あっ」と声を上げる。

「さっき、オーボエ協奏曲でソロを吹いてた…」

「あら、よく覚えてたわね。嬉しいわ」

「やっぱり…」

蘭は両手を合わせて笑みを浮かべた。

「すごく、素敵でした！」

「ありがとうございます。私もあの曲好きなのよ」

忍木は、ふと時計を見て「おっと」と小五郎に済まなそうに眉を下げた。

「すみません、毛利さん。そろそろ練習を始めますので…。どうぞ、ゆっくり見ていって下さい」

「ありがとうございます」

それを機に、全員がステージへと戻っていく。その時、浅上は蘭達にまるで秘密ごとを相談するように言い残した。

「後で控え室に来て。本番までいろいろお話ししましょ」

「え…」

「じゃあ、また後でね」

最後に片目を瞑って去っていく浅上を見送ると、園子は興奮したように蘭を見た。

「やったじゃん、蘭！浅上瑠美子って言ったら、その筋じゃ有名なのよっ」

「でも、いいのかな？本番前なのに」

「いいんじゃないのー？本人が言ってるんだから」

「そうかなあ…」

（にしても…）

会話を交わす二人の足元で、コナンはす、と目を眇めた。

（あの時　　）

私もあの曲好きなのよ。

（一瞬、殺気を感じたような…）

彼女の視線の先

コナンは睨みつけるようにして、視線だけを一旦後ろに向け、次にステージに移した。

ステージではすでにチューニングが始まっている。殺気などまるで感じられない。

(気のせいか……)

「コナン君？」

「えっ？」

考えに耽っていたコナンは、突然かけられた声に弾かれたように顔を上げた。そこには、蘭達がすでに椅子に座って自分を見ている。

「座らないの？リハーサル始まるよ？」

「あ、ごめんごめん。ちょっと、考え事してて」

「そう…」

コナンは気付かなかった。蘭が何処か遠くを見るようにコナンを見ていたことに。

「ガキんちよが一丁前に何考えてんだか」なんて言う園子のからかに、笑いながら「何でもないよ」と返すコナンを見て、す、と目を細める。

「蘭？」

「え、あ、何？」

「何、って…。だから、練習始まるよ」

「あ、そうだね。ごめん」

「もー、しっかりしなよ」

「うん…」

それきり、園子はステージに視線を移したが、蘭の目はずっと、厳しい表情で何かを考えているコナンに向いていたのだった。

リハーサル終了後

「あー、もうっ！何回吹かせる気なのよ！」

後から出てきた浅上は、苛立たしげにそう吐き出した。蛇口を捻り、水を出す。

「仕方ないわよ。瑠美子はソリストなんだから」

それに苦笑して木ノ内は手の水気を払って言うと、ハンカチで手を拭った。

「だからって…、あ！いつけない、ハンカチ忘れちゃった。ごめん、静。ハンカチ貸してくんない？」

「ああ、ならもう一つハンカチあるから貸すわよ？間違えて二つハンカチ持って来ちゃったから」

木ノ内は鞆からもう一つ、白いハンカチを出すと、それを浅上に差し出した。

「ほんと？サンキュー、助かるわ」

それを受け取って手を拭く浅上を見て、木ノ内は扉を開けた。

「まあ、とにかく頑張りましょ。 あれ？七海？」

ちょうど通りかかったのか、目の前を春川が通り過ぎていくのを見て木ノ内は声を上げた。

「あ、静さん、…瑠美子さんも」

こうして三人は一緒に控え室まで行くことになった。

「瑠美子さん、お疲れですか？」

目頭を押さえる浅上に、春川は心配げに尋ねた。

「あー、そんなじゃないのよ。ただ、楽譜をずっと目で追ってたから気疲れしちゃって」

「あ、それならビタミン剤入ります？あたしもそういつことあるんで、いつも持ってるようにしてるんです」

鞆を漁って、春川は掌くらいの小瓶を取り出した。中には黄色い錠剤が入っている。

「助かるわ。後で飲むから、しばらく借りてもいいかしら」

「どうぞ」

「悪いわね。じゃあ、後で」

通路を挟んで、静と七海の控え室は右に、瑠美子の控え室は左にある。瑠美子は軽く手を振って二人と別れた。

「兼嗣…」

そして、身を翻した自身の控え室の前に立つ人物を見て、忌々しそくにその名を呼んだ。

「よしよ」

「何しに来たのよ」

すでに睨みつけるような目つきの瑠美子に、志堂は「んな、睨むなよ」と慌てて両手を振った。

「私とアンタはもう他人よ。気安く話しかけないで」

「おいおい、他人はねえだろ？同じオケのメンバーじゃねえか」

「同じオケのメンバーでも他人だって言ってるのよ！ 岩崎！」

声を荒げた瑠美子は、その時ちょうど後ろを通りかかった岩崎の名を、勢いのまま呼んだ。

こっそりと通り過ぎようとしていた岩崎は、肩を跳ねさせて「はいいいっ」と顔を青くする。

「飲み物買ってきて！いつものやつよ！早く！」

「はいいー！」

口喧嘩

「ひっでえなー、パシリかよ？」

転がるように駆けていった岩崎の背を見送って、からかうように志堂は浅上を振り返った。

「煩いわね、アンタには関係ないわよ」

吐き捨てるように言って、浅上は志堂を押し退けると、控え室の扉を開けようとする。それを、志堂は慌てて引き止める。

「ま、待てよ！ほ、ほらこれ！好きだろ、お前。買って来たんだ、ZIGOB Aのチョコレート」

「……そ、ありがとう。貰っておくわ」

浅上は志堂が差し出してきたZIGOB Aのロゴの入った紙袋を受け取ると、すぐにまた控え室の扉をしようとする。志堂は足を挟んで慌てて隙間から入り込んだ。

「ちょっと！一体何なの！？」

「話くらい聞けよ！」

「話なんてないわよ！言ったでしょ！？私達はもう何の関係もないの！チヨコレートは貰うわ。次に来るときは金を持ってきた時にして！」

「…っ！」

あまりの言い様に志堂が言い返そうと口を開いた時だった。

コンコン。

静かなノック音が、殺伐とした空間に波紋を広げた。弾かれたように二人は扉を見る。そこへ、少女の声がかかった。

「あの、毛利蘭ですけど。浅上さん、いらっしやいますか？」

それは先程、話をしようと言をかけた探偵の娘。本番前に気分を紛らわせようと声をかけたのだが、ちょうどいい。

浅上は唇に笑みを浮かべた。それから志堂を見下すように見ると、出来る限りの優しい声で返事を返す。

「浅上さーん？」

「あ、ごめんなさい！入っていいわよ？」

扉が開かれた。
。

だじゃれクイズ

「いいなー、コナン君」

ソファに身を沈め、歩美は心底からそう言葉を漏らした。それに同意をするのは光彦と元太である。

「ほんと、コナン君だけ抜け駆けなんて狡いですよ！」

「俺達がこうしてる間にも、きっと鰻重鱈腹タラフク食ってんだぜアイツ！」

そんな子供達の文句に、阿笠は氷をたっぷり入れたオレンジジュースを四つ持って「まあまあ、そう言うでない」と宥めた。

子供達はそれを喜んで受け取る。

「コナン君は園子君に誘われたんじゃから、仕方なかるう」

「えーっ、でも僕達だっで行きたいです！」

それでもやはり、納得出来ないのか、光彦が抗議の声を上げた。すると、つられて二人も賛同する。唯一、灰原だけが静かに本を捲つ

ていた。

阿笠は困ったように「うーん」と唸り、「ならば、ワシが連れてってやらんでもないぞ」と提案を示した。

当然、子供達は目を輝かせる。

「本当！？博士！」

「おー、もちろんじゃとも。ワシは嘘をついたりなんかせんぞ」

「じゃあ、僕達もコンサートいけるんですか！？」

「やったぜ！」

皆、嬉しそうに満面の笑みを浮かべて顔を向き合わせ、やったー！とはしゃいでいる。

それを温かく見守っている阿笠に、灰原は読んでいた本を閉じて、白衣の裾を引っ張った。

「ちょっと…」

「ん？」

「大丈夫なの？あんなこと言って、チケットもない癖に」

「何、大丈夫じゃよ。実はついちょっと前、知り合いの科学者から“行けなくなつたから”とチケットを貰つてのう。ちよつと五枚あるから、誘おうと思つてたところじゃったんじゃ」

最後に片目を睨れば、灰原は「そ、ならいいけど」とまたソファへと戻つた。そこで、阿笠一つ咳払いをして子供達の注意を集める。

「ただし、ただでとは限らんぞ」

「えーっ!?!」

「まさか…」

歩美は不満げに声をあげ、嫌な予感に光彦は表情をひきつらせる。そんなことも気にせず、阿笠は意気揚々と宣言した。

「ここでみんなにクイズじゃ!」

はあ、と灰原は小さく溜め息を零した。

「さて、問題じゃ」

阿笠は人差し指を立てた。

「えー、ある日、皆で集まって演奏会を開くことになった。楽器は
各々持ち寄ることになったのだが、ある人物は何故か楽器ではなく
お金と空き缶を持って来たのじゃ。さて、その楽器は次のうちどれ
かな？」

そして三つの選択肢を出した。

Aフルート

Bサックス

Cトランペット

答えはやっぱりだじゃれ

問題を全部聞き終わって、三人は頭を捻らせた。そんな子供達に、灰原はクスリと笑う。その時、歩美が「分かったー！」と手を挙げる。

「きつとBのサックスよ！金色でピカピカしてて、お金っぽいもん！」

すると、続けて光彦も声をあげた。

「それなら、Cのトランペットもじゃないですか？金色だし、ピカピカしてますよ？」

「理由としてはどちらも不十分ね。それだけじゃあ、空き缶に意味がないし、サックスもトランペットも金以外にも銀色もあるわ」

灰原の意見に、歩美と光彦は納得と同時に肩を落とす。反対に、元太は「じゃあ、Aだ！」と嬉しそうに手を挙げた。

「フルートって言ったら、金持ちが吹いてるやつだろっ？」

あまりにも大雑把な答えに、もはや阿笠は苦笑しか出ない。

「おいおい、君達。お金ばっかじゃなくて、空き缶にも注目してじやな」

「C」

「え？」

静かに漏らされたクイズの答えに、阿笠や歩美達は灰原へ視線を向けた。彼女の視線は相変わらず本へと向けられている。

「答えはCよ」

また繰り返し言った。

「キーワードはお金と空き缶ね。この二つの言い方を変えればいいのよ。お金は“金”、空き缶は“缶”」

ここまで灰原が言うと、光彦が「分かりましたあ！」とスッキリしたような表情を浮かべた。

すると、歩美と元太が興味津々に光彦に問う。光彦は何処か優越感

を感じているようで、自慢げに説明し始める。

「つまり、“キンカン”。金管なんですよ！」

曖昧な発音がはっきりと金管になる。だが、まだよく分かっていないらしい。首を傾げる歩美達に、光彦はさらに続けた。

「楽器には金管楽器と木管楽器の大きく二つに分けられるんです。例外はありますが、リードを使うのは大体木管楽器、マウスピースを使うのは金管楽器ですね。金と缶、キンカン、きんかん、金管！ね、金管楽器になるでしょ？そうすると、さっきの選択肢の中で金管楽器はトランペットだけ！つまり、答えはこのトランペットになるって訳です！」

「そっかあー！」

光彦の説明に歩美は手を合わせて納得していたが、元太はどうにも釈然としなかったらしい。唇を尖らせて言った。

「また、ダジャレじゃねーか」

阿笠はただ苦笑した。

飲んで、食べて、飲んで

「元太君まだ食べるんですか？」

あれから一旦家に帰った歩美達は、また阿笠の家に集まり愛車のピートルに乗って東京新音楽ホールに向かっていた。

今から行けば、一時間前には着くとのことである。

「本番中に腹鳴ったら困るだろ。今のうち食つとかなきゃな」

そう口一杯に頬張ったのは、先程コンビニで買ったホットドックである。その拍子に服に飛び散ったケチャップに大慌てする元太、光彦、歩美を見て、灰原は視線を前に戻した。

「にしても、哀君が答えるとはのう。君はてつきり、そういうのは興味がないと思っと思ったが…」

「あら、私もコンサートに行きたかったもの。悪い？」

「いや、そういうわけではないんじゃないが…」

困ったと阿笠が笑った時、後部座席に乗っていた歩美が「あ！」と嬉しそうな声を上げた。

「ねえねえ、見て！あれじゃない？東京新音楽ホール！」

その声につられて光彦と元太も前に身を乗り出した。「うわあ……」と感嘆したように息を漏らす。ビルの隙間から見えるガラス張りの独特な形。テレビで見たものと同じ。間違いない。

「はい、そうですよ！あれです！東京新音楽ホール！」

クリーム色のビートルは、吸い込まれように駐車場に入っていく。

「外観もさることながら、中もなかなか立派じゃのう」

さすが、ニユースやバラエティーでも取り上げられるだけあり、中もデザイン性に優れていた。子供達ははしゃぎ回ってあちこち見ている。

「本当、凄いわね。一体どれだけのお金が使われたのかしら」

灰原は近くにあった綺麗な熱帯魚の水槽を見上げて言う。それに阿

笠は相変わらずだと苦笑して、歩美達に注意を促した。

「これこれ、他のお客さん達の迷惑になるから。あんまりはしゃぎ回ってはいかんぞ」

「はい」

それに、三人は素直に返事をして阿笠と灰原の元へ駆け寄って来た。まだ一時間前だというのに人が多い。カップルや親子など、様々な客が見て取れた。

「すごい数だね」

「本当ですね。まだ一時間前なのに」

キョロキョロと辺りを見回す歩美と光彦。阿笠は「どれ、何処かに座って待っていていよう」と提案した。

「あ、俺、喉渴いたからどっかでジュース買ってくるよ!」

「またですかーあ?」

先程ホットドックを食べたのに、また飲み物を飲むと言う元太に光彦は呆れたように言った。

それに灰原は肩をすくめた。

「仕方ないんじゃない？ ホットドックなんて食べたなら口の中の水分、全部持っていかれるもの」

「そついでことー！」

迷子

勢いよく駆け出したはいいものの、初めて来る場所に元太は道に迷っていた。

ふ、と辺りを見回せば、どうやら随分奥へ来てしまったらしい。人影が少ない。何とか自動販売機で飲み物を買えたが、仲間の元へ戻れず、元太はほとほと困っていた。

「はあ、皆何処にいるんだ？」

心細さに眉を下げる。とりあえず、来た道を戻ろうと身を翻したし時だった。

「うわぁっ」

誰かとぶつかってしまった。顔が誰かの脚にぶつかり、手に持っていたペットボトルが落ちてしまう。床に尻餅をついて、衝撃に顔をしかめていれば、相手も慌てていたようで「ごめんよ、坊や！」と手を差し出してきた。

その手を素直にとらせてもらおう。黒縁眼鏡をかけた、如何にも気の弱そうな人物であった。

「え、と……。どっちだろ……」

落ちた二つのペットボトルは、どちらも同じ物であった。元太はキヤップを開けていないし、それは向こうも同じらしく、一向に見分けがつかない。

仕方なく、適当な方を元太に渡すことにした。

「はい、坊や。悪かったね」

「あ、ああ」

男は、元太の返事も聞かずにまた慌てて駆け出すと、一つの扉に入ってしまった。

「変なおっさん」

浅上瑠美子控え室前

「ねえ、本当にいいのかな？」

蘭はまだ気が引けるのか、隣を歩く園子に問うた。

「大丈夫だって。向こうが誘ってきたんだからさ」

修羅場？

「そうかな？」

「そうそう！ほら、行くよ」

園子は蘭を引っ張るようにして浅上の控え室の前に立たせた。コナンもその蘭の隣に立つ。逡巡の後、蘭は少し控え目にノックした。

「あの、毛利蘭ですけど。浅上さん、いらっしやいますか？」

反応が返ってくるのを待つ。しかし、浅上からの返答はない。園子と蘭は顔を見合わせ、首を傾げた。

「いないのかな？」

「そんなことないんじゃない？」

導き出した答えに、コナンはすかさず否定をした。

「だって、さっき中から人の声聞こえたもん」

もう一度、蘭は園子と顔を見合わせる。

「浅上さん？」

すると、今度は間違いなく返事は返ってきた。蘭はそつと扉を開ける。そして、異様な中の雰囲気動きを止めた。

「あ、…と、私達お邪魔でした？」

怒りを見せる志堂と、それに似合わぬ笑みを浮かべた浅上。その場にはお世辞にも和やかとは言えぬ雰囲気漂っていた。

「げ、修羅場…？」

園子が漏らした呟きは、恐らく外れてはいまい。

「あー、いいのよ。気にしないで頂戴。ね？　志堂さん？」

何処か“志堂さん”のところが強調されたような台詞に、蘭はただ「はあ…」と曖昧に頷くことしか出来ない。

(気にするっつーの)

コナンもただ苦笑を漏らした。

志堂は変わらぬ笑みを浮かべる浅上に舌打ちし、ポケットに手を突っ込むと、蘭達を押しつけ部屋を出て行った。

「ごめんなさいね。彼、短気なのよ」

「ああ、いえ。気にしないで下さい。こっちこそ、本番前にお邪魔しちゃって」

「あら、気にしなくていいのよ？こっちが誘ったんだもの。さ、座って？」

オーボエソリスト

三人は、勧められるまま白いソファに腰掛けた。蘭は、ふと机の上に置かれたオーボエに目を留める。

「あの、オーボエって難しいんですか？」

「え？ああ、確かに最初に始めた時は大変だったわね。でも、慣れればそんなでもないわ」

「でも、どうしてオーボエなんですか？あたしだったら、ヴァイオリンとか、もっと目立つ楽器を選ぶけど」

身を乗り出して尋ねた園子の質問に、蘭は吃驚して園子の名を呼んだ。それは言外に地味だと言っているようなものである。

しかし、浅上自身はあまり気にしてないようで、吹き出すと声を出して笑い始めた。

「確かにそうね。地味だわ」

「す、すいません！」

蘭は慌てて頭を下げる。園子は隣で乾いた笑いを浮かべていた。呆

れたコナンも「こいつ…」と内心で咎めながら、引きつった笑みを浮かべるしかない。

「いいのよ。素直でいいじゃない。んー、でも、オーボエが活躍する曲って結構あるのよ」

「へえ！どんな曲ですか？」

興味深げに蘭は聞き返す。浅上は「例えば」と前置きをして曲をあげた。

「ベートーヴェンの『英雄』やチャイコフスキーの交響曲第七番、ブラームスの交響曲第三番とかね。オーボエを吹く者にとっての三大交響曲って言われてるわ」

「あ、それ知ってます！」

音楽が得意な蘭だ。「確か、オーボエのソロがあるんですよね？」と言っ。

「よく知ってるわね！そうなのよ。ただベートーヴェンもブラームスも、暗めの曲だから吹けないんだけどね」

浅上は残念、と肩を竦めた。

(へえ)

(全っ然、分かんないわ…)

ちなみに、コナンと園子はついていけない。

「あれ？」

彼女なりのジंकウス

ふ、とコナンは何気なく机に移した。

「ねえ、お姉さん。何でこのリードだけ糸が赤色なの？」

コナンが指差したのはオーボエのリードだった。

リードとは、金管楽器におけるマウスピースのようなもので、薄い木で出来ている、音を出すための部分のことである。

そこに巻かれた細い糸の色を、コナンは言っている。オーボエに取り付けられたリードに巻かれたのは赤、残りのケースに入れられたのは黄色である。

「あ、本当だ」

蘭も気付いき、園子も身を乗り出した。

「よく気付いたわね、僕。凄いじゃない。気付いた人は初めてよ」

浅上は感心したように言っつて、クス、と笑いコナンを見た。とりあえず、「へへー」と照れたように笑っておく。

「これはね、私なりのジnkクスなのよ」

「ジnkクス？」

「そう。私がまだオケに入る前、オーディションを受けた時にね、いつもは黄色の糸を使っつてたんだけど、その日はたまたま赤色の糸を使っつたの。そしたら、今まで落ちっつぱなしだっつたオーディションに見事合格！無事、初舞台に立っつたっつて訳。それから、本番にはいつも赤色を使っつてるのよ」

懐かしそうに目を細めてオーディンを見る浅上。蘭と園子はへえ、と笑みを浮かべた。

「素敵ですな」

その時、コンコンと扉が叩かれた。浅上の応答に開かれた扉。そこには岩崎が立っつていた。肩が上下していることから、相当急いでいることが分かる。

「あの、買っつてきました」

岩崎が持っていたのは、橙のラベルのペットボトル。昔からある定番のオレンジジュースだ。

「ああ、お疲れ様。そこ、置いておいて」

「は、はい」

岩崎は、近くのテーブルにペットボトルを置いて部屋を出て行った。何となく居心地が悪くなって、蘭と園子は顔を見合わせる。

（おいおい、パシリかよ…）

気の強そうな顔つきだが、裏の顔を垣間見た気がしてコナンは顔をひきつらせた。

ZIGOBBAのチョコレート

コンコン。

また部屋のドアが叩かれた。今度入って来たのは木ノ内だった。

「忍木さんに言われて、紅茶を持ってきたの。どうぞ」

ステンレスのお盆に、氷がたっぷり入れられたアイスティーとコーラを載せられている。

「ありがとうございます」

「はい。コナン君はコーラね」

「うん！ありがとうございます」

すると、浅上は「そうだわ！」と立ち上がるとテーブルに置かれた紙袋から包みを取り出した。蘭は“ZIGOBBA”の銘柄を見て、「わあ！」と笑みを浮かべる。

「ZIGOBBAのチョコレートですか？」

「ええ、そうよ。貴女も好き？」

「ああ、いえ。もちろん、私も好きなんですけど、私の母が好きなんです」

「そうなの？私、貴女のお母様とは仲良くなれそうだよ」

丁寧に包みを開いていき、浅上はその箱の蓋を開けた。綺麗にデコレーションがなされたチョコレートが並んでいる。

「良かったら食べてね？」

「あ、じゃあお言葉に甘えて」

園子は一つ、ハート型のチョコレートを摘んだ。

「んーっ、美味しい！」

「じゃ、瑠美子。私、行くわね」

木ノ内はステンレスのお盆を脇に抱え、身を翻した。

「あっ」

その際、木ノ内の足がテーブルにぶつかり、リードナイフがコロコロと転がり床に落ちる。

「ごめん、瑠美子！落としちゃった！」

「ああ、いいわよ別に」

ちょうどチョコレートを一粒口に入れ、木ノ内からリードナイフを受け取る。木ノ内は「ごゆっくり」と去っていった。

「いつけない、チョコレート持った手で触っちゃった」

一方、浅上は先程チョコレートを持った手で触り、汚れたリードナイフの絵をハンカチで拭いていた。丁寧に拭き終わると浅上はハンカチを畳んでしまう。白いハンカチがうっすらと茶色に染まっていた。

「綺麗ですね、そのハンカチ」

「ああ、これは私のじゃなくて静のよ。借りたの」

ワインレッド色の開幕

「え？」

蘭は思わず素っ頓狂な声をあげた。

（ははー、他人のハンカチで拭くなよなー…）

綺麗な刺繍の入った白いハンカチを思い返して、コナンは木ノ内に同情したのだった。

それからまた、チューニングで浅上が呼ばれるまで談笑は続いた。

小五郎を加えたコナン達四人は、二階席の特等席に座る。この時、阿笠や灰原、少年探偵団の面々は一階席中央にいたのだが、彼らが気付くことはなかった。

ブザー音と共に会場が薄暗くなっていく。ざわついていた空間が波を引くように静かになり、ワインレッドの幕が上がる。ステージに並ぶ楽器は圧巻だ。遅れて指揮者である忍木が登場すると、拍手が響いた。

一番始めに演奏されたのは、“ヴァーグナー、交響曲八長調”。さらにラヴェルやバッハなどの曲が演奏される。そして、ベートーヴェン、交響曲第七番の演奏が終わった。

『これより、20分間の休憩とさせていただきます。開始時刻は

』

「凄かったね、蘭！」

「本当、来てよかったね！」

（確かに、凄かったな）

興奮したように話す蘭と園子の会話に、コナンも心の内で同意する。

その時だった。休憩しているはずの忍木が、慌てたようにこちらに駆け寄ってくるのではないか。遠目からでも分かる位に青ざめている。

ただならぬ予感

「毛利さん！」

切羽詰まったような声音で呼ばれ、小五郎は訝しげに振り向いた。

「忍木さんじゃないですか。どうしたんですか、そんなに慌てて」

「それは ……」

しかし、忍木は小五郎の問いに答えようと口を開いたまま、周りを気にするように見回し口を閉じる。

コナンは目を眇めた。

「ここではちょっと、こちらに来て頂いても？」

声をひそめる忍木に、只ならぬ事情を察したのだろう。小五郎は顔つきを厳しくすると「分かりました」と頷いた。

「悪い、蘭。俺は席を外すから、お前たちは此处で待っていてくれ」

「え」

蘭は心配げに小五郎の後ろ姿を見送ったが、その視界に見覚えのある小さな背中を見た気がして隣に視線を移した。

「あれ？蘭、がきんちよは？」

蘭は眉を寄せた。

考えられることは、ただ一つ。疑問は尽きることがない。疑わしさが増していく。

「ちよ、蘭!？」

次の瞬間、蘭も駆けだしていた。

突如の死

疲れたようにドアを開け、彼女はソファに座り込んだ。先程もらったビタミン剤を取り出し、まあ、いいやとオレンジジュースと一緒に飲み込む。

不意に時計を見て部屋を出た。

だが、五分経つてすぐに戻ってくると苛ただしげにまたソファに座り、オーボエのリードを外し、「うそ…」と呟いて慌てて目の前に持ってきた。

「最悪…」

大きな溜め息をついて、仕方なしにそのリードをしまつと、リードケースを開け、また「え？」と訝しげに零し辺りを見回す。

しかし、時間を見て諦めるとリードとリードナイフを取り出した。まず、リードを口に加え音を鳴らす。それからリードナイフで削り、また鳴らす。

しばらくそれを繰り返して、満足げに頷くとリードをオーボエに取り付ける。

また、彼女は時計を確認した。

ソファから立ち上がり、ドアへと向かう。異変が現れたのはその時
だった。

「うっ」

バツと彼女は喉へ手を当てる。

「っは、あああ

…っ！」

助けを求めようと、ドアへと向かうも、叫びをあげることにもままならぬまま、彼女は崩れるようにその場に倒れたのだった。

光る赤いパトランプ

角を曲がって、視界に入ってきたのは泣き崩れる木ノ内の姿だった。扉が開け放たれたまま、木ノ内は部屋に背を向けるようにしゃがみ込んでいる。

「木ノ内さん！」

小五郎は何かあったのかと駆け寄ると、顔を覗き込むようにして「何があったんですか？」と尋ねる。

そこへ、コナンも追いついた。

「瑠美子が…っ、瑠美子が…っ」

コナンは開け放たれたままの扉に目を遣り、慌てて部屋を覗いた。瞬間、目を見開く。

始めに目に入ったのは放り出されたままの手。そして、血の気のない青紫色の唇と、瞳孔の開いた瞳。そう、コナンが見たのは、すでに事切れた浅上瑠美子の姿だった。

追いついた蘭の悲鳴があがる。

「瑠美子が…っ、死んでる…っ！」

悲痛な声で、木ノ内はそう言った。

東京新音楽ホールの前に、赤いランプの光るパトカーが数台、止められていた。

「ふーむ。では、第一発見者は木ノ内静さん、貴女なんですか？」

カメラのフラッシュ音が鳴り響く。通報を受け駆けつけた目暮は、一通り話を聞いて頷いた。

「はい。休憩時間に次の曲の打ち合わせをすることになっていたのに、なかなか来ないので呼びに来たら、こんなことに……」

話しているうちに思い出したのか、静の目に涙が浮かんだ。蘭と園子は落ち着けるように背中を撫でてやる。

二人の証言

「それで、忍木さん。貴方は？」

「私はちょうど、こここの廊下を通りかかって。そしたら、木ノ内君の叫び声が聞こえたんで、来てみたら…」

「被害者が死んでいたと？」

言葉を継いだ目暮に、忍木は「はい」と頷いた。それで、と目暮は先を促す。

「混乱が起きないように、木ノ内君には内密にするようお願い、ちよつどこちらにいらしていた毛利さん呼びに行つたんです」

目暮は半分瞼を閉じた目を後ろへと向けた。そこには見慣れたグレイのスーツに身を包んだ小五郎の姿。笑みを浮かべている。

「お勤めご苦労様です！警部殿！」

「また君かね、毛利君」

その声には明らかに呆れが含まれている。

「いやあ、探偵の性なのか。事件が私を呼んでるんですなあ！」

そう笑う小五郎には目暮も、側で聞いていた高木も何も言えはしなかった。

「それで、毛利君。君が来た時はすでにこうだったのかね？」

一変して真剣に問うてきた目暮に、小五郎も顔つきを変えて答えた。

「ええ、恐らく間違いはないでしょう。私が駆けつけた時、瑠美子さんはすでに息は耐えていました。それから誰も、中には入れてはいません。入ったとしたら」

小五郎はまず、忍木に目を遣った。

「私を呼びに来た忍木さんか」

次に涙を浮かべる木ノ内に目を遣る。

「第一発見者である木ノ内静さんだけでしょ」

なるほど、と頷いた目暮に、忍木は「ちよつと、待って下さい！」と声をあげた。

「私は部屋に入っていませんよ！ドアの外で泣き崩れていた彼女に事情を聞いて、すぐに貴方を呼びに行きましたから！」

忍木はそうして、示すように部屋の中を指差す。

「中に入らなくても、すぐに見えますからね」

「確かにそうだな」

「そ、それなら私もですっ」

今度は、木ノ内が慌てて声を上げる。このままでは自分が疑われるかもしれない、と焦ったのだ。

「ドアを開けて、すぐに気付きましたから……」

それらの証言を、高木は手帳に書き込むと「じゃあ」と言った。

「現場は殺害されたまま、というわけですね」

「ああ、二人が嘘をついていなければの話だがな」

「そんな…っ」

目暮の台詞に、木ノ内と忍木は顔を青ざめた。

容疑者が揃う

「警部」

検死を終えた検死官が、ボードを持ってやってきた。コナンはさすが小五郎の側に寄る。

「詳しいことは解剖しなければ分かりませんが、恐らく毒による心配停止が死亡の原因と思われます。死後硬直の具合から見て、それほど時間は経っていないものかと」

「ふむ。毒殺か …」

コナンは聞き終わって、するりと小五郎の横を通り過ぎ、部屋に入っていく。

「毒物が何に仕込まれたか分かったんですか、警部殿？」

コナンはポケットに手をつっ込んで、部屋をぐるりと見渡した。今のところ、毒物が入っていた可能性があるのは四つだろう。

「いや、だが被害者が死亡前に口にしたと思われる物は四つ」

目暮は小五郎と共に部屋に入る。

「チョコレート、オレンジジュース、ビタミン剤、アイスティーだ」
「なるほど。どれも怪しいですなあー」

小五郎は腰を屈めてテーブルに並べられた物を見やると、指で髭を撫でる。

「警部！連れて来ました！」

一度、消えたと思っていた高木が三人の男女を連れてやってきた。その顔ぶれは、コナン達が先程知り合った者達ばかりである。

「おいおい、何なんだ？いきなり」

「あの、何かあったんですか？」

「コンサートが中止って聞いたんですけど…」

呼ばれた理由をまだ知らされていないらしく、三人は口々に疑問を

口にした。押し黙る忍木や悲痛な表情を浮かべる木ノ内の様子に、只ならぬ状況を察しているのか顔は険しい。

「嘘だろ…」

「そんな、まさか…」

知らされた真実に、志堂と岩崎の顔から血の気が失せる。無理もない、身近な人物の死を唐突に知らされたのだから。春川などは、目暮に詰め寄り声を荒げる。

「どうしてですか!?! どうして瑠美子さんが!」

「落ち着いて下さい! 今、我々が捜査をしていますから!」

志堂に制され、春川は渋々さがった。だが、ふと志堂が気付き、問う。

「ちょっと待て…。じゃあ、俺らが呼ばれたのは、疑われてるってことか!?!」

三人の表情が強張る。目暮はここではぐらかしても仕方がないと、正直に頷いた。

「貴方がただけではありません。会場のスタッフと会っていたというアリバイのある忍木さん以外の全員。つまり、そこにいる木ノ内さんもです」

木ノ内の表情がさっと曇る。最初に反発したのは志堂だった。

犯人はいるはずだ

「ふざけんなよ！俺らがやった証拠なんてねーだろ！」

「ですから、まだ可能性の段階です。しかし、被害者を殺す動機、そしてアリバイがなかったのは貴方がただけなんですよ」

きっぱりと言う目暮に、志堂は押し黙った。一方、小五郎は尋ねる。

「おい、高木。動機ってのは何だ」

「ああ、はい。実は、あそこにいる四人全員に動機があるんです

」

高木は胸から手帳を出し、あるページで捲る指を止めると書かれていたことを読み始めた。

「まずは志堂兼嗣。彼は殺された浅上瑠美子と恋人関係にあったそうなんです。最近酷いふら方をしたそうなんです。何でも、今まであげたプレゼントに使ったお金を返せと迫られていたとか」

「おいおい、酷いな…」

「続いて木ノ内静。彼女は一ヶ月前、同じオーケストラのオーボエ奏者であり、婚約までしていた恋人を交通事故で失ったそうです。」

それで、その後釜である浅上さんを酷く疎んでいたと。そして次に岩崎進。彼は被害者から使い走りにされていて、まるで子分みたいな扱いだっただけです。最後に春川七海。彼女は先ほど説明した志堂兼嗣の元彼女。順調な交際をしていたそうですが、被害者に奪われてしまったそうで、一時は険悪な仲だったそうです」

「なるほど。全員、動機は充分って訳か」

コナンは高木の台詞を聞いて、床に視線を落とした。すでに浅上の死体は回収され、そこには今、白いテープが貼られている。

(いるはずだ、この中に …)

怒りや悲しみの表情を浮かべる面々を、鋭い視線で見上げた。一人、些細な表情の変化や仕草を見逃さぬように。

(浅上瑠美子さんを殺した犯人が …)

チョコ美味しかった？

(いるはずだ、この中に。浅上さんを殺した犯人が)

コナンは手掛かりを探すために部屋を見回した。目立ってあるのは、蓋の開けられたチョコレート、ビタミン剤、ペットボトル。

おそらく、蘭達が来たままになっているのだろう空いたグラス。

毒を仕込めるものは多い。

(……………ん?)

ふと、コナンはテーブルの上のオーボエを見て眉を寄せた。

(どっして…)

次に目についたのは小さな木屑。一瞬、塵かとも思うが、よく見たら違うことが分かる。

(これは、もしかして…!)

「うーむ、しかしどれも怪しいな」

目暮はテーブルを見下げながら唸った。

「これは、結果が出るまで待つしかありませんなあ」

「少なくとも、チョコレートとビタミン剤に毒は入ってなかったと思うよ?」

小五郎の台詞に、幼い声がそう言った。聞こえた声に二人の視線が下に向けられる。

テーブルに手をついたコナンが、笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「どういうことだね?コナン君」

「だって、毒が入ってたら大変なことになっちゃうもん」

「ああ?何でだよ」

トンチンカンなコナンの言葉に、小五郎は顔をしかめた。それを気にした素振りのないコナンは、扉の外にいる園子を呼んだ。

「ねえ、園子姉ちゃん!」

「ん？何よ、ガキンチョコ」

「チョコレート、美味しかった？」

何でもないような台詞。しかし、小五郎と目暮は顔を驚愕と焦りを浮かべて園子に詰め寄った。何のことか、すぐに分かったようだ。

「食べたのか！？園子君！」

「は、…へ？」

「おい、答える！食べたのか！？食べてないのか！？」

突然両者に問い詰められるも、園子は何が何だか全然分かっていないようである。

「ちよ、お父さん！？どうしたのよ、いきなり」

そこへ、コナンがやって来た。

「叔父さん達は、園子姉ちゃんがチョコを食べたか聞いてるんだよ」

「チョコ？」

蘭は何故そんなことを？と首を傾げる。園子も聞いていて、「ああ」と納得すると「食べたけど…」と答えた。

途端、「何イ!？」という二人の大声が響いて、園子は肩を跳ねさせる。

「大丈夫だよ」

二人を安心させるように、コナンは言った。二人の視線は再度、コナンに向けられる。

「浅上さんが初めてチョコを食べた時に園子姉ちゃんも食べたから、もし毒が入ってたとしたら園子姉ちゃんにも、もう発作が見られるはず」

園子が顔を青ざめさせて、慌てて手を喉にやった。蘭も焦りを見せ、て心配げに園子を見る。

それをコナンは笑みを浮かべながら見て続けた。

「それが見られないってことは、毒が入ってないってことでしょ？」

普段と違う反応

「そう言われてみれば……」

「そうだな……」

そう唸る目暮と小五郎。園子はほっと息をついた。

コナンはさらに言う。

「それにビタミン剤も、錠剤を直接手渡されたならともかく、あんなにたくさんの中から毒薬だけを飲ませるなんて無理じゃない？もし、全部を毒だとしても、後で調べたらすぐに分かっちゃっよ？」

「それもそうだな」

目暮はふむ、と頷いた。高木も納得したようで、目暮に言う。

「じゃあ、チョコレートを持って来た志堂さんとビタミン剤を渡したという春川さんは除外出来ますね」

「ああ、そうなるな」

そうすると、犯人は二人に絞られる。未だに肩を落とし、ショックからぬけ切れていない木ノ内、そしてオドオドと落ち着かない岩崎。

コナンは部屋に戻って再度辺りを見回す。

(浅上さんを殺した方法は分かった。となると、ん?)

目についたのはペットボトル。オレンジ色のラベルについた赤い付着物。

と、コナンの頭上がぬっと陰った。その正体を確かめようと顔を上げ、「げ」と顔をひきつらせる。

「で?」

「お、叔父さん...?」

「なあんで、お前がここにいるんだ?」

「あは、あははは...」

そして、次の瞬間コナンは扉の外へ投げ飛ばされていた。

「...」

「大人しく待ってろつつつたる！子供はすつこんでろ！」

襲った衝撃に思わず叫ぶコナンに、蘭は慌てて駆け寄る。そして、すぐに小五郎を睨みつけた。

「ちょっと、お父さん！」

「煩え！てめえがちゃんと見とかねーから、いけねんだろ」

「いーじゃない、別に！」

コナンは驚いて蘭を振り返った。角度から横顔しか見えないが、その表情は一見いつも通りに見える。しかし、いつもとその反応が違う。

もー、駄目じゃない。お父さんの仕事の邪魔しちゃ。

あはは、ごめんなさーい。

普段だったら、こんなやり取りになるはず。

(蘭…?)

当の蘭はコナンの焦りに気がつかず、小五郎に言い含めていた。

「コナン君って、いつも面白いことに気がつくし。さっきだってコナン君のお陰で違ってる分かったんでしょ？」

「いや、しかしだなあ」

普段とは違う蘭に、小五郎も困ったように言い淀んだ。

やじつてじじい

「あー、とにかく！ガキはそこら辺で遊んでろ！」

最終的にはそう締めくくって、小五郎は部屋へと戻っていった。それに蘭は大きく息をつくとき、コナンの顔を覗き込む。

「コナン君、大丈夫？」

「え？あ、うん」

「そ？良かったー。ごめんね？お父さんが」

「あ、大丈夫だよつ。別に」

そんな蘭に不自然な所は見られない。

（気のせいかな？）

「コナン君？」

「あ、僕ちょっとトイレ行ってくる！」

「え、コナン君!?!」

気のせい、そう言い聞かせて、コナンは廊下を駆けた。犯人と思しき人物は二人。

足を緩めて考えに耽る。

(気になるのは、あの赤い付着物だ…。血でないなら一体…)

「あ、コナン君!」

聞き慣れた自分の呼ぶ声に、コナンはパツと顔を上げた。いるはずのないその者達に、コナンは驚いて目を丸くする。

「お前ら、どうしてここに!?!」

手を振って駆け寄ってくる歩美に続き、元太と光彦、後ろから遅れて灰原と阿笠がやって来るのが見える。

「私達もコンサートを見に来たの!」

「博士に連れて来てもらったんです!」

「抜け駆けだったってそうはいかねーぞ、コナン!」

口々に言う三人の後ろから灰原が現れた。

「灰原、お前も来てたのか」

「あら、悪い？」

澄ました表情で言われる台詞には、相変わらず可愛げがない。コナンはそう思いつつ、「誰もんなこと言ってるねーだろ」と返した。

「私だって、コンサートに興味あるのよ。ま、誰かさんのお陰で、また事件が起こってしまったようだけど？」

(誰かさんって俺のことかよ…)

休憩時間などとうに過ぎ、今日のコンサートは中止になっている。まだ、所々に人は見えるが、いずれも帰ろうとしているようだ。

「また君も大変じゃのう」

「貴方、一度お被いしてもらった方がいいんじゃないの？」

「灰原、てめえ覚えてろよ」

説得力ゼロ

「んで？」とコナンは話題を変えようと口にした。阿笠を見上げて問う。

「何で博士達はまだここに残ってたんだ？」

「それは」

阿笠が答えようとして、「だって！私達、少年探偵団よ！？」という声がそれを遮った。

コナンがつかわれて振り向くと、歩美達三人が自分を見て眉を吊り上げていた。

「そうですね！少年探偵団として、僕達が活躍するチャンスじゃないですか！」

「お前ばっかいい思いさせねーぞ！」

「な……」

拳を強く握り締める様から、俺達は諦めねーぞ、という強い決意が

見て取れる。

しかし、人が殺された事件だ。事故で遭遇してしまったならともかく、自ら首を突っ込むなど許す訳にはいかない。しかも、彼等は小学生である。

「バーロツ、人が一人死んでんだ、子供が関わられる問題じゃねえ！」

そうコナンが叱責するも、今身体が小さくなり、同じ子供の姿である彼の台詞に説得力があるわけもなく。

「コナン君だって、子供じゃない！」

何も言い返せず、言葉に詰まるコナン。後ろで灰原が「彼等の方が一枚上手ね」と言ったのが聞こえた。

「とにかく、今回は大人しく」

無理矢理に話をまとめようとしたコナンの視界に、あるものが入った。

「コナン君？」

歩美が不思議そうに首を傾げる。しかし、コナンの視線は尚も一点に向けられている。

「元太、お前それ」

コナンの目が捉えていたのは元太の持っていたペットボトル。オレンジ色のラベルは先程、浅上の控え室で見た物と同じもの。

「何だ、コナン。お前も飲みてえのか？」

元太は問うが、すでにコナンの耳にその声は届いていない。今度は元太の服の胸元についた染みを食い入るよう見つめている。すると、それに気付いた光彦が「ああ」と説明し始めた。

「それ、ここに来る車の中で、元太君が食べていたホットドックのケチャップの染みですよ。元太君、コンサートの最中にお腹が鳴ったら困るとか言って」

「そしたら、せっかく買った新しいシャツ汚しちゃうんだもん」

「う、煩え！仕方ねーだろ、腹減ってたんだから！」

朗らかな笑い声を何処か遠くで聞きながら、コナンは見つけた手掛かりに口元に笑みを浮かべていた。

(そうか…。やっぱり犯人はあの人…！)

コナンの瞳に光が宿る。

(だったら、あれにはきつと…)

「お前えら、悪いがちょっと協力してもらいたいことがある」

三人の顔が輝く。

「本当!？」

「ああ。まあ、正確には元太にだけだな」

「お、俺か？」

何かあっただろうか？と自分で分かっている元太は首を傾げる。

「探偵バッジで呼ぶから、そうしたら来てくれ」

そう言い残して、コナンは去っていった。

小五郎の推理

その頃、事件現場でも進展を迎えようとしていた。

「ん？どうしたの、蘭？」

先程からキョロキョロと落ち着かない蘭に、園子が尋ねた。

「うん…。コナン君がさっきから見当たらなくて…」

「ああ、だあいじょうぶよ。あの子、年の割にはしっかりしてるし。問題ないって」

「うん…」

そういうことではない。園子の励ましに、蘭は小さな笑みを浮かべて頷いた。

本当は違うのだ。ただ、その存在に過敏になってしまっているだけ。彼は、と信じている自分と、彼だから、と不安な自分。駄目だな、私は。

蘭はそんな自分に嫌気がして顔を俯ける。

そんな時、高らかな声が耳に響いてきた。

「分つかりましたよ、警部殿！」

父、小五郎の声だ。弾けるようにして顔を上げると、謎は全て解けたと言わんばかりの表情を浮かべている。

「本当かね、毛利君！」

「勿論です！」

小五郎はそうして四人の被疑者に向き合った。彼等は身を硬くする。

「犯人は岩崎進さん、貴方です」

ピシッと指を差された岩崎は、目を大きく見開き顔を青ざめさせる。周りもざわめき、岩崎を信じられないと見つめていた。

「ち、違う！僕じゃない！」

「嘘……」

「岩崎、お前」

「違う…、違う…っ。僕はやってない！」

そう訴える岩崎に、小五郎は推理を説明し始めた。

「貴方、随分と浅上さんから酷い扱いを受けていたようですねあ」

「そ、それは…」

「貴方はそれが嫌で堪らなかった。だが、気の強い浅上さんに対し、気の弱い貴方は何も言えなかった。そして、とうとう貴方に殺意が芽生えてしまう」

小五郎は続ける。

「貴方は予め、何処かで毒を手に入れ、常に持ち歩きチャンスを狙っていたんだ。まるで召使いのように扱われていた貴方には、それが山ほどありますからなあ。そして、そのチャンスがやってきた」

岩崎の顔色はどんどん悪くなっていく。

「ジュースを買うように頼まれた貴方は、持ち歩いていた毒を入れ、何食わぬ顔で浅上さんに渡した」

岩崎の顔色はすでに生きているのか、と問いたくなるほど。「どうですか、岩崎さん」と小五郎が突き詰めるも、「違う」と呟くように言うだけで何も答えなかった。

「違う、違う…。僕はやってない」

「しかし、毛利君。証拠はあるのかね」

そこで、自信ありげだった小五郎の動きが止まった。それに、蘭や園子、目暮、高木に嫌な予感が走った。

「まさか…、お父さん…」

「まさか毛利君…」

「証拠がない、なんて言わないわよね…」

「あはは〜」

蘭の顔が引きつり始めた。

「お父さん…」

不穏な空気に小五郎の顔も青ざめ始める。

その時だった。

小五郎に天の助けが現れる。

眠りの小五郎の始まり

「警部！岩崎進の控え室からこんな物が」

一人、控え室を調べていた警察が空いた小瓶を持ってきた。至って平凡な小瓶。今の状況でなければ。

「そ、それは！」

「中を調べましたが、恐らくは毒が入っていたケースかと」

「ち、違う！僕じゃない！」

岩崎は必死に否定するが、すでに周りからしてみたらただの言い逃れにしか聞こえない。

「凄いじゃない、おじ様！眠ってないのに！」

「なーっはっはっ！」

そこへ、コナンが現れた。それに気付いたのは蘭だけ。

「それでは岩崎さん、署に一緒同行願いますか？」

「ちょっと待って下さい」

目暮が岩崎の腕を取って、扉に向かおうとした時だった。鋭い小五郎の声が制止をかける。

「へ？」

いきなりの制止に、目暮はキョトンと小五郎を振り返り、小五郎も突然聞こえてきた覚えのない自分の声に意味が分からないようで、指を自分に差して首を傾げる。

その間にコナンは小五郎の後ろに周りソファの背もたれに隠れると、そこから時計型麻醉銃の照準を合わす。プシュツという小気味のよい音を発し、小五郎に命中した。

途端、小五郎は奇声を発しながらふらつき始める。それはつまり具合にソファに寄っかかる形となった。

「来たのね、おじ様！」

園子が興奮したように言う。

「……………」

その時、蘭の表情が何かを見たかのように驚きに染まっていたことに気がついていなかった。

「どっぴうことだね、毛利君」

目暮は体を向き直した。

「岩崎さんは犯人ではありません」

コナンの推理

「はあ？」

目暮が怪訝な声を上げた。それはそうだ。さっき自信満々に岩崎が犯人だと告げた張本人なのだから。

「君が彼を犯人だと言ったんじゃないかね」

「ええ。しかし、それはあくまで真犯人を油断させるためです」

こうして推理ショーは始まった。

「ポイントはそこのテーブルに置かれているオーボエです」

コナンによつて眠らされた小五郎に促され、目暮はテーブルを覗き込んだ。言われたままにオーボエを見るが、何ら変わった所はない。

「オーボエがどうかしたのかね」

「注目して欲しいのはリードです。何色の糸が巻いてありますか？」

「り、リード？」

小五郎に言われるも、リードが何なのか分からない目暮の頭にはク
エスチョンマークが多数浮かぶ。そんな目暮に代わって、高木がオ
ーボエを見た。

「黄色ですね」

その時、蘭が「え？」と声を上げた。

「どうかしたのかね、蘭君？」

「あ、いえ。私達が本番前にここに来た時は、赤い糸が巻いてあっ
たので…」

「何？」

蘭の証言に、目暮の眉が怪訝そうに顰められる。

「実は、殺された浅上さんには一つジンクスがあったんです。その
ため、彼女は本番には必ず赤い糸のリードをつけるようにしていた。
そうだな、蘭？」

「うん。このオーケストラに受かった時に赤い系のリードを使っていたから、それからは駿（ゲン：縁起）を担いでそれを使うようにしていたって言っていました」

小五郎はそれらを踏まえるようにして、目暮に問うた。

「おかしいと思いませんか？どうして本番前につけていた赤い系から、休憩時間の間に黄色の系のついたリードに代わっていたのか」

そこまで言われて、目暮は考えられる可能性に気がつく。

「ま、まさか毛利君…」

「ええ、そのまさかなんですよ。毒は食べ物に入っていたんじゃないかもしれません。オーボエのリードに、予め塗られていたんです。黄色の方のね」

トリック

「し、しかし毛利君。一応そのリードも調べたが、何も出なかったぞ」

目暮は問うた。一応、被害者が口に含みうる物は全て調べたが、どこにも毒は検出されなかったのだ。

しかし、ここで小五郎は思いもよらぬ返答をする。

「当たり前なんですよ」

そこにいる者全員表情に、疑問が浮かぶ。

「毒は浅上さんによって、全て隠滅させられてしまったんですから」

「な、何い!?!」

「その理由を説明する前に、志堂さん、春川さん。これ、何だか知ってますか?」

コナンは小五郎の手に乗せておいたリードナイフを、あたかも小五

郎自身が見せるかのように持ち上げた。

「いんや。俺は他人の楽器にや興味ないんでね」

「私も…、瑠美子さんが持つてるのは見たことありますが」

二人が答え、小五郎はその答えを言う。

「実はこれ、リードナイフといってオーボエ奏者がリードを削るために使用するものなんです。そう、犯人は休憩時間、瑠美子さんを呼び出しておき、彼女が控え室を出た時を見計らい、侵入した。その隙に取り付けられたリードに傷でもつけ、予備の黄色のリードのうち一本を盗み、残ったもう一本に毒を塗ったんです。帰ってきた浅上さんは、赤い糸のリードに傷があることに気がつき、やむを得ず黄色のリードを使うことにし、調音するためにリードナイフを使っただけです。そのテーブルに、木屑が落ちていたのがその証拠です。調音するには、リードを口に含み、音を確かめながらでないとなんか出来ませんからなあ」

小五郎はここで一旦間を置いて言う。

「先程、リードナイフすら知らなかった志堂さんと春川さんは白でいいでしょう」

残るは二人

「じゃあ、残る岩崎さんか木ノ内さんが犯人ってことですね？」

高木が気まずげに俯く岩崎と木ノ内を見て言った。

「いや、さっきも言いましたが岩崎さんは白です」

「だがね、毛利君。実際、岩崎さんの部屋からは毒を入れたケースが見つかってるんだぞ。それに、もしかしたら飲み物に毒を入れたという可能性も」

きっぱりと言い切る小五郎に、目暮は納得いかないと、小五郎に言う。だが、小五郎の意見は変わらない。

「ケースは機会を見計らっていつでも置くことが出来ます。それに、彼の無実を証明する人がいるんですよ。コナン！」

小五郎の呼びかけに、コナンはソファの後ろから「はぁーい」と顔を出した。

「コ、コナン君！」

先程からいないと思ったら、と目暮は突然現れたコナンに驚きを隠せない。

コナンは扉の方へ顔を向けると、呼びかけた。

「おい、入ってきていいぞー」

そんな声に姿を現したのは元太を筆頭に歩美、光彦、灰原、阿笠であつた。

「君達、どうしてここに!？」

コナンは素早くソファに隠れ、口元に変声機を当てる。

「私が呼んだんですよ。岩崎さんの無実を証明する、重要参考人と
してね」

「ほ、本当かね、コナン君」

「うん!」

コナンは背中を向けて、また小五郎として話し出す。

「警部、浅上さんのテーブルに置かれたペットボトルに何か付いているのが分かりますか？」

ペットボトルを覗き込んだ目暮の目が捉えたのは赤い付着物。見えにくいのが、確かに赤い何かがついている。

「確かに何かついてるようだな」

「実はそれ、ケチャップ何です」

「ケチャップう？」

「ええ。岩崎さん、貴方ここにジュースを持って来るとき誰かとぶつかりませんでしたか？」

問われた岩崎は、一瞬目をさまよわせると「あ」と思い出したように元太を見た。どうやら、元太に見覚えがあるらしい。

コナンはまたソファから顔を出した。

「元太、その時のこと話してくれ」

「おう」

犯人は貴女だ

そして元太は自信満々に話し始めた。

「喉が渴いたからよ、ジュースを買いに行ったんだ。だけど、道に迷っちゃまって、しばらくしたら変なとこにいて。そしたらこのオッサンにぶつかっちゃまったんだ。オドオドして部屋に入ってたから、変な奴だと思っただぜ」

最後、岩崎を指差して話が終わる。コナンは再びソファに隠れた。

「その時でしょう。彼と岩崎さんのジュースが入れ替わってしまったんです」

その言葉に、目暮の目が元太の持つペットボトルに向く。それは、浅上のテーブルに乗ったそれと全く同じであった。

「ほら、見てよ！」

コナンはまたソファから顔を出し、元太の胸元についた赤い染みを指差した。

目暮が元太に近寄り見る。

「それ、元太が食べたホットドックのケチャップなんだ。そのケチャップが、テーブルの上のペットボトルにはついてるけど、元太が持つペットボトルには、もうケチャップが乾いてついてないでしょ？これってさー、ペットボトルが入れ替わっちゃった証拠だよね？」

「じゃ、じゃあ……、まさか……」

目暮の目がゆっくりと見開いていった。

「そう、浅上さんを殺し、岩崎さんを容疑者に仕立て上げようとした犯人、それは――」

蘭も園子も、その場にいた全員が信じられないとその人物に視線を向ける。

「木ノ内静さん。貴方です」

木ノ内は顔を硬くさせ、俯いていた。

あるはずのない指紋

「嘘でしょ、静さんが…!?!」

「ありえねーだろ…!」

オケのメンバーはまだ信じられないのか、木ノ内を見る目が揺らいでいる。

「嘘よ! 出鱈目デタラメ言わないで!」

木ノ内は今まで落ち込んでいたとは思えぬ程に声を荒げた。その勢いに、周りは息を呑む。唯一、眠っている小五郎だけが平然としていた。

「嘘じゃありません!」

「じゃあ、どうして、そのトリックだと私が犯人になるのよ! 岩崎にだって出来るじゃない! 毒がジューズに入ってたからって、こいつがやってないことにならないわ!」

凄い剣幕の木ノ内に指わ差され、岩崎の肩が跳ねる。

目暮も、木ノ内の言い分ももつともだとうむ、と頷いた。

「確かに彼女の言い分にも一理ある。証拠はあるのかね、毛利君」

「勿論ですとも。あるんですよ、貴女が犯人だと示す、確たる証拠が」

木ノ内の表情がわずかに厳しくなる。

「あるはずのない、指紋がね」

周りが不思議そうに首を傾げる。コナンの口元に小さな笑みが浮かんだ。

「あるはずのない」

「指紋？」

皆の疑問を代表するように、園子と蘭が繰り返す。

「ええ。先程説明したトリックに使われたはずのリードナイフ。警部達が来られた時にはちゃあんと仕舞われていました。それはそう

でしょう、出しっぱなしじゃ怪しまれますからね。木屑もごみ箱に入ってたってことは、それも片付けたのは間違いありません」

小五郎の声には確信が満ちていた。

「残っているはずですよ。証拠の残る手袋はしていなかったはずですから。リードナイフについた、木ノ内さん、貴女の指紋がね」

息を呑む音が、異様に静かな空間に響く。しかし、木ノ内はまだ諦めていなかった。

「リードナイフについてる指紋が何だって言うのよ！当たり前でしょ！？私、それに触ったもの！」

しかし、蘭と園子の表情は優れない。それに気付かず、木ノ内は「そうでしょ！？」と二人を振り返った。

「……………」

「な、何よ……………」

「……………」

「何なのよっ……………」

何も言えずに俯く二人に、嫌な予感がしたのだろう。焦ったように声を発する。

そんな彼女に、小五郎は言う。

「貴女は知らないのでしょうか。あるはずがないんですよ、貴女の指紋は」

「……………」

「貴女が去った後、浅上さんは一度拭いてるんです。チョコレートを食べた手で持ってしまったリードナイフを」

木ノ内の顔がみるみると青ざめる。

「貴女が貸したハンカチでね」

遡る一ヶ月前

高木は浅上の鞆から綺麗な刺繍の施されたハンカチを見つける。真っ白なハンカチは確かにほんのり茶色に染まっている。

それに、顔を険しくしていた木ノ内は大きく息を吐いて、諦めたような顔つきになった。

「静さん……」

泣きそうな声で春川が呟く。

「まさか、親切で貸したハンカチが証拠になるなんて……。本当、最悪な女……」

そして、木ノ内は全てを話し出した。

「そうよ。流石、眠りの小五郎ね……」

「やはり、一ヶ月前の……」

「そうよ！どうしても納得出来なかった！アイツが一ヶ月前に交通

きつと鋭い眼光で、木ノ内は隣に立つ岩崎を睨みつける。ビクツと岩崎の肩が跳ねた。

「それで、岩崎を容疑者に仕立て上げようとしたってのか」

「ええ、そうよ！同じ人を殺した罪を償ってもらうためにね！」

怒りに染まった木ノ内の表情に、一時部屋が沈黙がおりた。しかし、それは木ノ内の嘲笑にも似た笑いによって破られる。

「せっかくいいトリックだと思ったのに。誤算は毛利探偵、貴方がここに来たことかしら？」

小五郎を演じるコナンは何も答えない。

また降りた静けさの中、小さな声がした。

「違うんだ、木ノ内」

志堂だ。

申し訳なさそうに「違う」と言う志堂に、木ノ内は無感情な目を向

ける。

「何言ってるのよ、アンタ？」

「違うんだよ、木ノ内……。あれは事故なんかじゃない、自殺、なん
だ……」

後悔と憤り

「な、にを……」

突然の告白。

動揺を隠しきれずに、木ノ内は震える声で無意識に身を守るように志堂に構えた。

「何言ってるのよ！自殺……っ？冗談言わないで！」

「冗談じゃねーよ……」

俯き、視線を逸らす志堂には、木ノ内の言う冗談など欠片も見られない。それが伝わって、木ノ内も言葉に詰まってしまふ。その間に、志堂の話は進んだ。

「彼奴さ、コンサートの前からずっと悩んでたんだよ。思った演奏が出来ないって。このままじゃ、ステージには立てないって。何回もそう言ってた。お前に相談すればって言ったけど、彼奴、お前も本番前で疲れてのに余計な悩み事増やせないって……。それで……」

そこで志堂の話は終わった。木ノ内の顔が見れないのか、顔を上げる様子はない。

そして、木ノ内の表情は呆然と空を見つめたまま微動だにしなかった。

「……馬鹿よね」

沈黙の痛い空間の中で、ようやく木ノ内は言った。

誰も何も言わない。否、言えない。

「私を悩ませたくないって……、そんな気を回すくせに、どうして自殺なんて……っ、そんなことを選ぶくらいなら言っただけで済ませよう……っ！」

静かな叫びだった。木ノ内の目から、涙が零れる。

「ううん、違うわ。あの人の様子がおかしいことは気付いてた……。でも、言いたくないなら、無理に聞かないでおこうって、言ってくれるまで待とうって……」

声に溢れるのは後悔と自分への憤り。彼女には、その時の彼の背中が浮かんでいるのだらう。顔を覆う掌の隙間から見える瞳は、ここ

にある何も映していない。

一気に感情が溢れ出す。

「私が、あの時に聞いてれば…っ！近くに、近くにいたのに…
！っわあああああ　　っ！」

抑えきれない全ての感情が、叫びとなって木霊した。

愛する者を失い、自らの手を血に染めた愚かで悲しき女。

そんな彼女の叫びは、その狭い空間にいつまでも響き渡り、その場の全ての人間の心に突き刺さったのだった。

満月は陽炎のように

この時、二人が互いの想いに気がつくことはなかった。

（そう、もう、あなたは）

視線の先にある横顔。

灰原はそっと、目を伏せた。

丸い月が静かな町を優しく照らし、それでいて寂しげに浮かんでいた。喧騒の少ないこの辺りは、夜の十二時を過ぎれば途端に静かになる。

唯一、聞こえるのは時計の針を刻む音。

寝むる気になれなかった蘭は、足の赴くままに下の探偵事務所まで降りてきていた。普段、小五郎の座っている椅子の背もたれに体重をかけ、電気もつけず、ぼんやりと夜空を見上げる。

思い出すのは、今日の事件のことだった。可哀想な容疑者、木ノ内静が最後に涙ながらに口にした台詞。

私が、あの時に聞いてれば……っ！

近くに、近くにいたのに……！

頭にこびりついて離れない。彼女の胸に迫る叫びが、蘭には他人事には思えなかった。

(ねえ、新一……。新一はどこにも行かないよね……？)

知らず、蘭の瞳に涙が盛り上がる。

(帰ってくるって、約束してくれたよね……?)

綺麗な丸い月が歪んだ。ユラユラと陽炎のように揺らぐ。

(新一…っ)

ギョツと、何かを堪えるように閉じた蘭の目から涙が零れた。それが、床で弾けた時、切迫した心の声に答えるように、音をたてて背後のドアが開かれる。

つられるようにして、蘭は涙を拭うことすらせずに振り向いた。

空っぽのベッド

帰ってきてから、コナンはなかなか眠る気にはなれなかった。否、眠ることすら忘れているのかもしれない。

すでに煩い躰イレキをかいている小五郎の隣でコナンの思考を巡らしていた。普段なら煩く思うだろう小五郎の躰すらも、それを遮ることは出来ない。

余計な悩み事増やせないって…。それで…。

繰り返し響くこの台詞。彼女の婚約者は、彼女に胸の内を明かすことなくこの世から去った。それが、他人事には思えない。

自分も死ぬのだろうか。何より大切な彼女を置いて、何も明かすことなく、何も伝えられないまま、自分を信じてずっと待っていてくれるというのに。。。

ハッとコナンは我に帰った。

(何、弱気になってんだ　っ)

コナンはくそっ、と声に出すことなく自分を叱咤する。

(帰ってくるって、アイツと約束したじゃねえか…っ)

どうにも頭が冴えて仕方がない。コナンは小五郎を起こさぬよう、静かに布団から抜け出すと部屋を出た。

水でも飲んで、気持ちを切り替えようと思ったのだ。

冷たい水は、夏の暑い夜に火照った体にスーツと染みだ。そうすれば、ぐるぐると果てのない迷路に迷い込んだような思考も、スッキリとしたような気がしてわずかに表情が晴れる。

「ん…？」

部屋へ戻ろうとしたコナンの視界に入ったのは、蘭の部屋の扉だった。近寄れば、やはり少しだけ扉が開いている。

逡巡した結果、そつと中を覗き込んだ。

空っぽのベッド。

「……………蘭？」

コナンはふ、と最近蘭が寝不足なことを思い出した。

いてもたってももられず、コナンは考えられる場所、下の探偵事務所に向かう。

静かに階段を降り、やはり背を目一杯伸ばしてドアノブを回す。月明かりに照らされ、闇に浮かぶ見慣れた影。それがゆっくりと振り返った時、コナンは驚きに目を丸くした。

「蘭、姉ちゃん…?」

無意識に呼んだ名。

「コナン君?」

暗くて分かりにくい。しかし、コナンには一瞬、蘭が泣いていたよな気がした。コナンがゆっくりと歩み寄っていくと、やはり泣いていたのだらう、蘭が目元を拭った。

強がりな彼女の弱音

「蘭姉ちゃん、泣いてるの？」

月明かりに照らされ、わずかに光る頬。切なげに揺れる瞳。それだけでも、彼女が泣いていたと推理するには容易い。

それは、自分のせいか？

コナンはわずかに眉を寄せる。

「ううん、そんなことないわよ？」

しかし、蘭は何事もないかのように笑う。

嘘つくんじゃないよ。。

そう言いたくも、“コナン”は言えない。だから、いつも通り「そっか」と下手くそな蘭の笑みに騙されるふりをするしかないのだ。

そうすれば、彼女は「さ、寝よう。コナン君」と笑い、自分も「うん」と笑い。。。

「……嘘」

「え」

コナンは一瞬、何を言われたか分からなかった。

「何でもないなんて、嘘……っ」

言葉を失った。先程の笑みの名残のある頬を、大きな滴溢れ出して濡らしていた。そして、すぐに蘭の表情も何かを堪えるように眉根が寄せられる。

「蘭、姉ちゃん……？」

かつてない事態に、コナンはどうしていいか分からずにただ名を呼んだ。

「もう、ツライよ……」

コナンから視線を逸らさず、静かに零れた言葉。

「寂しいよ…」

脈略のない台詞だった。それでも、コナンには十分だったのだ。何がツラくて、何が寂しいのか。

「ねえ、コナン君…。新一は、何を考えてるのかなあ…っ」

蘭はまだうつすらと笑みを浮かべたまま言う。

「駄目よね、私。ずっと待ってる、って約束したのに。こんな弱気で…」

何も言えなかった、言えるはずがなかった。自分のせいで蘭が泣いている。コナンとしての自分で、どうやって慰めるといつのだろう。

悔しかった。

ぐっ、と拳に力を籠める。

「もう、無理だよ…」

何よりもツライこと

コナンはそつと顔を俯けた。もし、蘭がもう自分を待てないと言うのなら、それを引き止める権利などない。いつ元に戻るかわからないのだ。そんな我が儘をどうして言えるだろう。

しかし、自分にそれが言えるのだろうか？ “待たなくていい” それはつまり、蘭という支えを失うということ。

待ってる。

そう自分の帰りを信じてくれてきた蘭に、どれだけ助けられたのだろう。

そんな蘭を自分は …。

(ただ泣かせることしか出来ねえのか…)

コナンはそつ、と息を吐いた。俯いた角度で、眼鏡のレンズが月の光を反射する。

震える唇をぎゅっと引き締め、コナンが何か言おうと言葉を探した時だった。

「教えてよ……」

ポツリ、と呟かれた。

「教えてよ、新一……」

何かがおかしい。

コナンの目が、ゆっくりと見開かれていく。そのまま、俯いていた顔を上げ、視線が蘭に向けられた。

蘭の目は、真っ直ぐに自分を射抜いていた。何かの確信と覚悟を持つて。

「蘭姉ちゃん……?」

「新一、なんでしょ?」

ドクン、と心臓が跳ねる。

「な、何言ってるの?何かおかしいよ、蘭姉ちゃんっ。僕は新一兄ちゃんじゃ」

「おかしくなんかない」

大きく鳴る鼓動を感じながら、コナンは見た目だけ平静を装う。だが、上擦ってしまう声は装いようがなく、背中を冷や汗が伝った。

一方、蘭は否定されるのが分かっていたのか、わずかに眉を寄せただけだった。それでも、瞳は悲しげに揺れる。

「お願い、新一……。本当のことを教えて？」

蘭が懇願する。コナンは言いそうになる自分を堪えるのに必死だった。その度に、灰原の台詞を頭の中で繰り返す。

(言ってはならない……)

「や、やだなあ、蘭姉ちゃん！僕、小学生だよ？新一兄ちゃんな訳ないじゃない！」

途端、蘭の表情が悲しみに歪む。言ってはならない、そうは分かっているてもコナンは先程の台詞を悔いてしまう。

「私ね、新一を待つことに迷いなんてなかった……」

「え」

「そりゃ、もちろん寂しいし、心配だし…。でも、新一が帰ってくるって約束してくれたから。ううん、例え新一との約束がなくなっただって、私はきつと待ってると思う…」

(蘭 ……)

雲に隠れた月が、一時の間をおいてまた顔を出した。それが、優しさで悲しさに染まる蘭の顔を照らす。それがコナンにはどこか儚げに映った。

「でも私ね、怖くなったの…」

「え」

「静さんの話を聞いて、物凄く怖くなった…」

コナンは静かに話を聞く。

「もしかしたら、新一もいつか…っ、いつか、死んじゃうんじゃないか、って…」

躊躇うように、しかし最後は一気に言い切った。

「何も言ってくれないまま、何も教えてくれないまま、私の知らないところで……。そう思ったら、我慢出来なくなっちゃって……」

「……………」

現れた第三者

“コナンが新一である”ということは、もはや蘭の中で決定づけられていた。

新一を待つことが苦なのではない。寂しいし、会いたくて堪らなかつたけれど、それでも彼は帰ってくるかと信じていたから。

しかし、コナンが新一であると知ってしまった今、待ち焦がれた人に対して何も無いふりをするのがツライ。

自分の知らないところで、何かと戦い苦しむ彼がいるという事実がツライ。

そして、それすらを見てみぬふりをしなければならぬことがツライ。

今まで一番近くにいた彼。そんな彼と、離れ離れになったと思った時以上の距離を蘭は感じていた。

コナンは胸が痛かった。あの事件の時、蘭がそんなことを考えていたのかと思うと苦しくて、そしてそれと同時に蘭を想う気持ちが溢れる。

肯定してはいけない、しかし否定はもう出来なかった。

「僕、は……」

コナンは視線をさまよわせる。

「俺、は……」

蘭は何も言わない。

そして、コナンもそれから先を言うことが出来なかった。本当のことと言いたい。それを邪魔するのは、頭にちらつくジンやベルモットの顔。コナンは唇を噛み締める。

沈黙。

ただひたすら時が進む音だけが空間を支配する。

だがそれは、意外な第三者によって破られた。

「いいんじゃない？」

二人の視線が弾かれるように扉へと向けられる。

「灰、原……」

開けられた扉がゆっくりと閉じていく。そこに立っていたのは、腕を組んだ赤茶のウェーブの髪が特徴の少女、灰原哀であった。

「哀ちゃん？」

どうして彼女がここにいるのか、そんな疑問が声には表れていなかった。

迷いなんてない

しかし、哀はそんな蘭の疑問を無視して二人に近寄っていった。月明かりの元になった少女の表情は、相変わらずである。

「だから言ったでしょう、江戸川君」

哀はちら、と涙に濡れる蘭に視線を遣り、すぐにコナンに戻して言う。

「女は、男が思っている以上に人を見ているものだって……。それが大切に想う人なら、尚更」

コナンは前に言われたことを思い出す。あの時は、こうなることなど予想だにしていなかった。

「そして、貴方も同じ」

分かっているんでしょう？

灰原は確信している。

「もう、限界だって」

コナンは視線を逸らした。それが何よりの証拠。

蘭は下で行われるやり取りに困惑していた。全く話が読めない、が、もしかしてこの少女は知っているのだろうか。

「哀ちゃん、何か知ってるの？」

以前から、ミステリアスで少女には見えない少女であった。緊張した面持ちで蘭は尋ねる。

「ええ」

灰原はあっさりと頷いた。

「これから、彼が全て話すわ」

灰原の

告白

「全ての始まりは、トロピカルランドに行った時だ

」

そんな言い出しで、コナンの話は始まった。

黒ずくめの男達の取引現場を目撃したこと。毒薬を飲まされ、気付いたら体が縮んでしまったこと。博士の助言で正体を隠してきたこと。それからの全てのことを、包み隠さずコナンは説明していた。

説明を始めたのが夜の零時、しかし、話し終わった頃にはすでに針は一時を指していた。

「
つてわけだ」

しばらく、部屋は静かだった。

「バカ…」

小さな声にコナンは顔を上げる。そこには目を潤ませた、しかし泣いてはいない蘭がいた。

「バカバカバカバカ！新一のバカッ！」

「な
」

突然の暴言に、コナンは一瞬怯んだ後、すぐに体勢を立て直す。

「バカはねーだろ、バカは！」

「十分バカよ！」

コナンはさらに反論しようとして、蘭の声が震えていることに気がついた。勢いが一気に削がれていく。

「また、そうやって危ないことに首突っ込んで 。新一はいつつ
もそう、私に何の相談もしてくれない 」「

「それは…っ」

「私のことを考えてくれたのは分かってる！ …でも、やっぱり
話して欲しかったよ…」

他人の悩みや苦しみを、自分のことのように抱えてしまう幼なじみ。
だからこそ、コナンは打ち明けることを堪えてきた。

そしてやはり、蘭の表情は、新一の苦しみを自分のことのように痛がっている。

しかし、蘭はそれで苦しんでいるのではない。彼女の本当の苦しみは新一がそれを黙っていたこと。

「蘭、ごめんな？」

「どうして？」

謝る新一に、分かっている蘭は首を傾げた。

「何の訳があるうと、俺がお前を騙してたことに変わりはない」

伝えたかった言葉を

蘭は笑んだ。

正直、体の小さくなった新一には少し戸惑ったりもした。可愛らしかった“コナン”と今のギャップがあまりに激しくて。

しかし、落ち着いて見てみれば、やはりふとした仕草は変わらない。

「何笑ってんだよ」

笑みを浮かべている蘭に気がつき、新一が無然とした表情で問うた。人が真剣に謝っているというのに、何たることか。

しかし、蘭はやはりクスクスと笑ったままで言う。

「ううん、べつにいい？」

「あん？別にだとお？　　ったく、人が謝ってるつてのによお」

「ごめん、ごめん」

ひとしきり笑い終わると、蘭はふと懐かしげな目で新一を見た。表情の変わった蘭に、自然と新一の表情も変わる。

「やっぱり、新一は新一だね」

何て答えたらいいか分からず、新一はわずかに眉を寄せるだけで反応する。

構わず蘭は続けた。

「私、怒ってないよ」

「え…」

「あ、もちろん黙ってたことは腹立つわよ？でも、騙されたとは思ってない。むしろ、感謝しなくちゃね」

思いもしなかった台詞。新一は目を丸くして蘭を見た。そんな彼に、蘭は綺麗な笑みを浮かべて言うのだ。

“ありがとう、新一”

「私をずっと、守ってくれて」

言葉にしきれない程の、感謝を込めて。

新一は胸から何かが湧き上がるような思いに駆られた。かつてないほどの溢れる感情。

（ああ、これが　　）

愛しいというものなのか。

この感情をまだ言葉には出来ない。それはやはり、“新一”に戻って、機械越しではない自分の本当の声で　　。

だから、今は　　。

「バーロー」

“ただいま”と“愛してる”の変わりに　　。

お取り込み中

「お取り込み中悪いんだけど、ちょっといいかしら」

何だか妙な空気になりつつある空間に、少女の落ち着いた声が割り込んだ。

表情はいつも通りだが、どこか呆れたような声音に、二人はハッと我に返ると謝罪の言葉を口にする。

まあ、灰原としては長い心の枷から解放された二人に、ゆっくりと時間を与えたいところなのだが、それは後に回してもらおうことにする。

彼女としては、今を置いて告白するタイミングなどないのだ。

そう考えて、灰原はさっさと邪魔者を追い払うことにした。

「で、工藤君。貴方、大阪の彼に報告はしないの？」

「はあー？」

いきなりの話の変わりように、新一は何を言い出すのかと首を傾げる。

その時、蘭は「あれ？」と疑問を持った。今までは余裕がなかったために気がつかなかったが。

「そう言えば、何で哀ちゃんは新一のことを知ってるの？」

彼の両親や西の高校生探偵が知っているのには頷けるが、たとえば灰原が大人びているとはいえ、先程の話を理解するには彼女はまだ小学生だ。

そう、新一が今までの経緯を話した時、まだ灰原のことは説明していなかった。それは灰原自身から話した方がいいという新一の判断だ。だから、蘭はまだ灰原の正体を知らない。

蘭は不思議そうに灰原に視線を遣った。

「ほら、早くしなさいよ」

それに灰原は再度、新一を促した。今度は新一もその意味が分かり、頷く。

「あ、ああ。そうだな。彼奴にもいろいろ世話になったからな」

新一はそそくさとソファから降りると、扉へと向かう。

「え、新一!？」

「悪い、蘭。またすぐ戻ってくつからよ」

「ちよつと」

パタン、と扉が閉まった。部屋には灰原と蘭の二人が残される。

「大丈夫よ。そんなに心配しなくても、彼はちゃんと戻ってくるから」

不安そうな顔をして閉じた扉を見つめる蘭に、灰原はそう言った。

「今までも、彼が貴方を置いていった訳じゃないってこと。分かっただけでしょう?」

「うん…。そうだね…」

蘭は体勢を元に戻して、灰原を静かな目で見つめた。

「哀ちゃんは、どうしてそんなに新一のこと知ってるの?」

罪

灰原はずかに目を伏せた。

「だって、知っているもの。彼は貴女を誰よりも大切に想っている
ってこと」

「えっ!？」

突然言われた台詞に、蘭は頬をさつと桃色に染めた。それを見て、
灰原はクス、と笑う。

全てを話せば、彼女に嫌われるかもしれない。たった一人の家族だ
った、姉とよく似た彼女。

正直言えば、怖い。

(でも、これが私の罪)

灰原は覚悟を決めた。

「先に謝るわ。ごめんなさい」

「え…」

また突然謝られて、蘭は目を丸くした。

「彼があんな風になってしまったのは、私のせいなの」

A P T X 4 8 6 9 を作ったのは自分だということ、自分も昔その組織にいたこと、組織を抜け出すために新一と同じ薬を飲んだこと。

灰原は全て話した。淡々と、胸にくすぶる恐怖をひた隠しにして。

「これが全てよ」

一気に話して、そつと息をついた。意外と疲れるものだ。

「私が憎い？当然だわ、私はそれだけのことをしたんだもの…」。

謝って済む問題じゃないってことも分かってる。どうか気の済むまで殴ってちょうだい」

視界の端で、蘭の腕が上がったのが見えた。咄嗟に灰原は目を瞑り、襲うだろう痛みを覚悟した。

しかし、痛みの代わりに訪れたのは、優しい温かな体温だった

優しさをかぶらせる

そこまで言つて、灰原は口を閉じた。興奮したせいか、ハアハアと肩が激しく上下する。

しかし尚、蘭の表情は優しい。ふ、と灰原は苛立ちと共に泣きたくなる衝動に駆られた。

あまりにも、目の前の彼女は姉に似ている。

「ごめんね。でも、感謝したいっていうのは本当なの」

蘭は表情を呆れに変えた。

「どーせ、あの推理オタクのことだから？状況も省みずに事件に首突っ込んだりして、哀ちゃんを困らせたりしたんでしょ？」

灰原は今までを思い返してみる。確かに、毎度事件のこととなると見境なく首を突っ込んで自分ハラハラとさせたものだ。

「やっぱりー！」

そんな灰原の表情を読み取ってか、蘭は大きく溜め息をつく。

「ほんつと、彼奴はいつもそう！事件事件事件事！そのせいで何回私との約束すっぱかしたとか！」

灰原は容易にそんな情景が頭に浮かんで、額に掌を当てた。どこまでも女心が分かっていない男だ。

「だから、ね…」

急に和らいだ声に灰原は顔を上げた。そしてやはり、そこには柔らかい表情の蘭の顔があつて、目を丸くする。

（お姉、ちゃん…）

「哀ちゃんには感謝しなきゃ。今まできつと、彼奴はいろいろ無茶してきたんでしょ？自分の身も顧みずに。彼奴、そういう奴だから。きつと、哀ちゃんがいなきゃ大変なことになってたと思う」

蘭はふ、と笑みを深くする。

「哀ちゃん、新一を守ってくれてありがとう」

「っ」

違う。

灰原は今までのことを思い返す。自分を守ると言ってくれた、運命から逃げるなど諭してくれた。守られていたのは、自分。。

「違うわ。守られていたのは、私」

好きなんでしょ？

「私はただ、守られてばかりいる……」

蘭は悲しげに微笑んだ。例え周りがどれだけ許そうと、彼女はまだ、自分を許せないのか。

確かに、彼女が今までしてきたことは許し難いことなのだろう。そして、それは蘭にとっても同じこと。新一がああなってしまうことの原因の一端は、目の前の少女にある。

しかし、他の誰よりも自身の所行を悔い、他の誰よりも自身を責めている彼女をどうしてこれ以上責められよう。

せめて周りだけでも彼女を許してやらねば、一生幸せにはなれない。時間をかけてでもいい、ゆっくりと、幸せになって欲しいと思う。

(だって、哀ちゃんもただの女の子だもんね)

「哀ちゃん、新一のこと好きなんでしょ？」

突然の問いかけに、灰原は勢いよく蘭を見ると目を丸くした。蘭の表情は相変わらず笑みを浮かべたまま。

己の分際だと怒っているのか、呆れているのか、それとも憐れんでいるのか。何れかと思いきやのその表情に、灰原は徐々に肩の力を抜き、代わりに顔には笑みを浮かべた。

それは優しく、しかし諦めも含んだ笑み。それでも表情は清々しかった。

「安心なさい。私、勝ち目のない恋愛はしない主義なの」

蘭はほ、と息をつくくと、慌てて取り繕うように体裁を整えて咳払いした。

「あ、いや、私は別に。しし、新一のことなんか、何とも…っ」

矢印は互いを向く

灰原は呆れたように溜め息をついた。

「まさか、バレてないとも思っているの？」

「へっ？」

「バレバレよ。貴女が工藤君のことが好きなことくらい」

蘭の顔が暗闇でも分かるくらいみるみるうちに赤くなっていく。

それが微笑ましくて、灰原は気付かれぬように小さく笑う。お互いがお互いを大切に想っていることなど、端から見ればすぐに分かる。

「普通、偶に現れては何も言わずにいなくなる、電話しか寄越さない男なんて、どうでもいいと思っていたら待つてられないもの」

「っっ」

穴があったら入りたいとはこういうことか、と蘭は身を持って知った。真っ赤になった顔を隠そうと両手で覆い、身を屈める。

「まあ？それは工藤君も同じでしょうけど」

「え」

蘭は恥ずかしさも忘れて顔を上げた。灰原はソファに身を沈め、腕をくんだまま空に浮かぶ月を見ている。

その時、扉のノックする音がした。

新一はドアを閉め、何処に行こうか迷った末に階段を降りて行った。降りきったところで壁に背を預けると、ちょうど雲から顔を出した月が彼を照らす。

一時それに見とれ、新一はポケットから携帯を取り出し電話帳から服部を見つけてダイヤルボタンを押した。

正直出るとは思っていない。すでに時計の針は二を指そうとしてい

る。普通なら寝ている時間だ。しかし、予想とは裏腹にダイヤルの音は鳴り止む。

『今何時やと思うとんねん！このポケ！』

そう思いきや、近所迷惑になりやしないかと不安になる程の大音量が耳をつんざいた。

電話報告

「あの、わり。俺…」

『ん？ああ、なんや、工藤かいな』

キンキンと響く耳を堪えながら新一がそう告げれば、服部は気が抜けたように言った。遠くでバフツと倒れ込んだ音がしたことから、恐らくは寝ていたのだろう。

「ああ。悪いな、こんな時間に」

『いや、それはええけど。どないしたんや、こないな時間に』

服部は声を低くする。

『もしかして、何かあったんか？』

「あ、いや。そういう訳じゃねえんだ。ちょっと、報告にな」

『報告？』

「ああ」

新一は空を仰ぎ月を見る。その表情は晴れ晴れとしており、わずかではあったが笑みも浮かんでいた。

「俺の正体、蘭にはれた」

途端、電話の向こうの音が一切消えた。

「おい、服部？おい」

『な…』

「な？」

『何やてえええええ！？』

再び耳をつんざく叫びが上がったのだった。

突然の約束を

『なるほどなあ。知らん間にえらいことなつとるやないけ、工藤』

一通り説明を終えると、服部は納得したようにそう言った。

「ああ。俺だつて吃驚してんだ。今までバレてねえと思ひ込んでたんだからな」

『でもまあ、結果的にはお互いこれで良かったやろ。工藤も姉ちゃんに隠し事せんでも良おなつたし、姉ちゃんも寂しい思ひせんてえんやからな』

「ま、そうなるな」

新一は心底から言う。蘭に自分の正体を隠し、彼女の悲しむ顔を見て見ぬ振りをする必要がなくなったのだ。蘭の命を守るためだったとはいえ、どれほど齒痒かったことか。

蘭は自分が守っていく。その決意を改めて固め、新一はそつと目を伏せた。

『そーや、工藤！祝いに今度そつち行つたるわ！』

「はあ!？」

服部は声を弾ませて唐突にそう言った。

『ええやろ、別に。来週の土曜に泊まりに行くさかい。ちゃんと予定は空けとき!』

「おい、服部!」

『ほんなら、また明日学校があるから寝るわ。んじゃ、またな工藤。お前も早よっ寝ろよ』

「ちょ、服部!？」

一方的に話を進ませた服部は、そう言うや否やブツリと大きな音をたてて電話を切った。気付いた時にはすでに単調な電子音が耳元で鳴っている。

「…………たく」

新一は諦めたようにそうぼやくと、恨めしげに携帯を睨みつけるとそれをポケットにしまった。それからしばらく月を眺め、そろそろいいかとタイミングを見計らって階段を上る。すると、中からは内容が聞き取れないが話し声が微かに聞こえてきた。

まだ話し終えていないのか。しかし、中からの雰囲気は重々しくはない。それならば、時間も時間だし中に入ってもいいだろう。そう判断して新一はドアノブを回した。

午前三時の解散

「新一っ」

「工藤君……」

新一が入ると、二人の視線が彼へと向けられた。

「話は終わったの？」

「ああ」

灰原の問いかけに新一は頷きながら、蘭の顔を見て首を傾げた。暗くて分かり難いが、どこことなく顔が赤くはないか？

「んだ、蘭。お前え、なんか顔赤くねえか？」

「ええ！？な、何でもないわよ！き、気のせいじゃない？」

「ふーん」

その焦りようがすでに“何かありました”と言ってるも同然である。当然、新一もそれに気付き、胡乱げな眼差しで蘭を見る。灰原は仕

方なしに助けてやることにした。

「彼はなんて？」

すると、新一の視線は「ああ」と灰原に向けられた。蘭はほっと息をつく。

「またこっち来るってよ。相変わらず突然な奴だぜ」

「いいじゃない。彼も貴方達のこと随分と気にかけていたし。嬉しいんでしょ？今回は大目に見てあげなさいよ」

「ああ。そうする」

肩をすくめる新一に、蘭は顔を輝かせた。

「服部君がこっちに来るってことは、もしかして和葉ちゃんも来るの？」

「そうなんじゃねーか？彼奴が来る時は大抵一緒だしな」

「わあっ！和葉ちゃんと会うの久しぶりな」

「今週の土曜は空けとけてよ」

「分かった！」

話が一区切りついたところで、灰原はちら、と時計を見て腰を上げた。すでに針は三時を回っている。

「ちょっと話し過ぎたわね。そろそろ解散しましょ」

それに習って時計を見た新一はげつと顔をしかめた。

「もう三時回ってんじゃないか！」

「嘘っ、明日も部活あるのに！」

「じつして、その日は解散となった。」

夢じゃない

ジリリリリ！！

と、耳元で目覚ましが鳴り響いて、蘭はハッと目を覚ました。体を起こして時間を確認する。ちょうど六時だ。

寝不足に重い体を無理矢理起こして、蘭は支度を済ませるとあと一時間したら起きてくるであろう二人のために朝食の準備に取りかかった。

その間も考えてしまうのは彼のこと。妙に緊張してしまう。昨夜のことは現実だったのであろうか。自分夢を都合良く現実と勘違いしてしまっただけなのではないだろうか。不安が胸に広がる。

目玉焼きの黄身が程よく固まった所で皿に盛り付け、ウィンナーとレタスを添える。味噌汁とご飯と一緒にテーブルに並べた所で、二人は起きてきた。

「ふああ…」

「あ、蘭姉ちゃん。おはよー…」

「おはよ、お父さん、コナン君。朝ご飯出来てるから、支度してきてね」

「はあーい」

とりあえず、今まで通りコナンとして接する。欠伸を噛み締めながら去っていく小さな背中を、何とも言えない表情で蘭は見送ったのだった。

と、思うや否や、洗面所に向かって行っただと思ったコナンが戻って来た。面食らうも、蘭は平然を装い「なあに？」と笑みを浮かべる。もちろん、“コナン”としてである。

すると、コナンは途端に顔をしかめた。

「おい、蘭。オメー、まさか昨日のこと夢だとか思ってたんじゃないだろうな？」

「えっ!？」

コナンとして認識しようとしていただけに、その台詞に蘭は素っ頓狂な声を出してしまった。

やはり、未だに“可愛いコナン”が頭に残っていて違和感を覚えますまう。

新一はそれで全てが分かってしまったのか、大袈裟に溜め息をついた。

「オメーのことだから、んなこったろうと思ったぜ」

「なっ、だ、だって仕方ないじゃない！」

蘭は思わず反発して、声を落とした。言い辛そうに新一から目線を外す。

「新一が、目の前にいるなんて、ゆ、夢…みたい、だし……」

わずかに頬を赤らめさせて蘭がそう言えば、新一もさっと頬を染めた。何て言えばいいかわからず、新一も考えるように目を泳がせる。

「バ、バーロー」

しかし、結局はいつも通りの台詞。灰原がいたら呆れているに違いない。頭の中で、灰原が肩をすくめてるのがありありと浮かんできて、新一は即座にそれを追いやった。

新一は気を取り直し、目の前の蘭を真っ直ぐ見る。

「ちゃんと俺はここにいる。夢じゃねえだろ？」

最後に笑みを浮かべれば、蘭もつられるようにして笑った。

「うん！」

その時、「らん！コナン！飯にすつぞー！」と呼ぶ小五郎の声に蘭は立ち上がると、「ちよっと待ってー！」と言いながら立ち上がった。それからコナンを振り返り、晴れやかな笑みで「行こう、コナン君」とリビングへ向かっていく。

新一はその背中を眺め、ふと笑みを浮かべたのだった。

「何だ、蘭。やけに機嫌いいな。何かあったのか？」

「んー？べつつにい？ね、コナン君」

「うん！」

ふーん、と気のなさそうな小五郎を後目に、二人はそつと目を合わせて笑ったのだった。

e n d .

夢じゃない（後書き）

終わりました！

『彼女が隠した心』どうだったでしょうか？

事件のトリックを筆頭に、いろいろと稚拙なところがあったと思います。

それでも、皆様が少しでも楽しんで読んで下さったなら幸いです。

もし、コナンの正体がバレるとしたらどうなのかなーと書いた小説でした。

個人的に、哀ちゃんに「勝ち目のない恋愛はしない主義なの」と言わせてみたかったのもあります。

服部が遊びに来ると言っていました。今のところ、その話を書くつもりはありません。

それでは、名探偵コナン二次小説『彼女が隠した心』でした。

晴香

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930s/>

彼女が隠した心

2011年5月23日15時34分発行